

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第89集

石井ヶ原遺跡群

1991

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

石井ヶ原遺跡群正誤表

頁・行	誤	正
5 ・ 3	<u>南流する</u>	<u>南西に流れる</u>
10 ・ 4	<u>長軸方向はN66° Eで</u>	削 除
24 ・ 6	<u>角礫状の石の一部</u>	<u>角礫の一部</u>
25 ・ 17	内傾するものと <u>は</u> わずかに	内傾するものと、 <u>わ</u> ずかに
図版 13	S K <u>3</u> 完掘状況	S K <u>2・3</u> 完掘状況

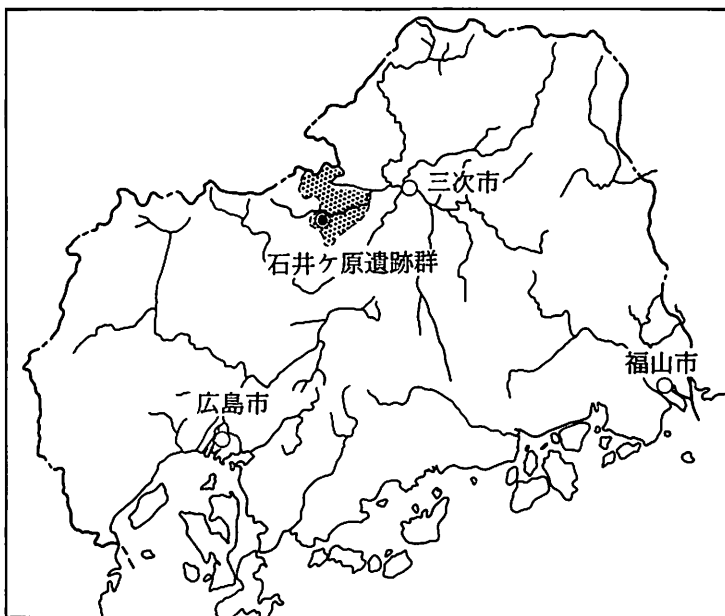
石井ヶ原遺跡群

1 9 9 1

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例 言

- 1 本書は、平成2(1990)年度に実施した一般国道433号道路改良事業に伴う高田郡高宮町来女木に所在する石井ヶ原遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、広島県吉田土木事務所から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 調査は、伊藤公一、金近忠昭、桑原隆博、石橋健太郎が行った。
- 4 出土遺物の整理、復元、写真撮影、実測、図面の整理などはセンター職員の協力を受け、伊藤が行った。
- 5 本書の執筆は、I、II、IV-3(2)を篠原芳秀、III、IV-1、VIを伊藤、IV-2・3(I)を桑原、Vを妹尾周三が行い、伊藤が編集した。
- 6 本書で使用の遺構標示記号は、SK：石蓋土墳墓・土墳墓、SX：石組遺構である。
- 7 挿図中の方位は、第1・2図を除き磁北である。
- 8 第2図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図(八重)を使用した。
- 9 挿図と図版の遺物番号は同一である。
- 10 当初古墓と考えられていたため、石井ヶ原古墓と称していたが古墳と判明し、さらに古墳1基と墳墓群が明らかとなったために、名称を変更した。



石井ヶ原遺跡群位置図

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	調査の概要	5
IV	検出遺構	6
	1 石井ヶ原第1号古墳	6
	(1) 墳丘	6
	(2) 埋葬施設	9
	(3) 遺物出土状況	10
	2 石井ヶ原第2号古墳	14
	(1) 墳丘	16
	(2) 埋葬施設	16
	3 石井ヶ原遺跡	17
	(1) 墳墓群(SK1~7)	17
	(2) 石組遺構(SX1)	24
V	出土遺物	25
	1 石井ヶ原第1号古墳	25
	2 石井ヶ原第2号古墳	30
	3 石井ヶ原遺跡SK7	37
	4 石井ヶ原遺跡SX1	38
	5 その他の遺物	38
VI	まとめ	48

挿 図・表 目 次

第1図	遺跡周辺地形図（1：2,000）	2
第2図	周辺主要遺跡分布図（1：50,000）	3
第3図	石井ヶ原遺跡群配置図（1：200）	5
第4図	石井ヶ原第1号古墳墳丘実測図（1：60）	7
第5図	石井ヶ原第1号古墳基底石実測図（1：60）	8
第6図	石井ヶ原第1号古墳埋葬施設実測図（1：30）	9
第7図	石井ヶ原第1・2号古墳遺物出土状況（1：100）	12
第8図	石井ヶ原第1号古墳出土遺物垂直分布図（1：60）	13
第9図	石井ヶ原第2号古墳墳丘実測図（1：100）	14
第10図	石井ヶ原第2号古墳埋葬施設実測図（1：30）	15
第11図	石井ヶ原遺跡墳墓群配置図（1：100）	17
第12図	石井ヶ原遺跡S K 1・2実測図（1：30）	18
第13図	石井ヶ原遺跡S K 3実測図（1：30）	19
第14図	石井ヶ原遺跡S K 4実測図（1：30）	20
第15図	石井ヶ原遺跡S K 5実測図（1：30）	21
第16図	石井ヶ原遺跡S K 6実測図（1：30）	22
第17図	石井ヶ原遺跡S K 7実測図（1：30）	23
第18図	石井ヶ原遺跡S X 1実測図（1：30）	24
第19図	石井ヶ原第1号古墳出土遺物実測図I（1：3）	27
第20図	石井ヶ原第1号古墳出土遺物実測図II（1：4）	28
第21図	石井ヶ原第1号古墳出土遺物実測図III（1：4）	29
第22図	石井ヶ原第2号古墳出土遺物実測図I（1：3）	31
第23図	石井ヶ原第2号古墳出土遺物実測図II（1：3）	33
第24図	石井ヶ原第2号古墳出土遺物実測図III（1：4）	35
第25図	石井ヶ原第2号古墳出土遺物実測図IV（1：3，1：4）	36
第26図	石井ヶ原第2号古墳出土遺物実測図V（1：4）	37
第27図	石井ヶ原遺跡S K 7出土遺物実測図（1：3）	37
第28図	石井ヶ原遺跡S X 1出土遺物実測図（1：4）	38
第29図	石井ヶ原第2号古墳出土石器実測図（2：3）	38
第1表	石蓋土墳墓一覧	23
第2表	出土遺物観察表	39

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡群遠景（南東から）
遺跡群近景（東から）
- 図版 2 石井ヶ原第 1・2 号古墳調査前の状況（北東から）
石井ヶ原第 1 号古墳表土堆積状況（北東から）
- 図版 3 石井ヶ原第 1 号古墳表土除去後の状況（南東から）
石井ヶ原第 1 号古墳表土除去後の状況（北東から）
- 図版 4 石井ヶ原第 1 号古墳基底石検出状況（北東から）
石井ヶ原第 1 号古墳埋葬施設検出状況（南東から）
- 図版 5 石井ヶ原第 1 号古墳基底石築造状況（北東から）
石井ヶ原第 1 号古墳基底石除去作業風景
- 図版 6 石井ヶ原第 1・2 号古墳配置状況（北から）
石井ヶ原第 2 号古墳・墳墓群配置状況（北東から）
- 図版 7 石井ヶ原第 2 号古墳墳丘検出状況（北西から）
石井ヶ原第 2 号古墳周溝内遺物出土状況（北西から）
- 図版 8 石井ヶ原第 2 号古墳埋葬施設検出状況（南東から）
石井ヶ原第 2 号古墳蓋石除去後の状況（南東から）
- 図版 9 石井ヶ原第 2 号古墳蓋石除去後の状況（南西から）
石井ヶ原第 2 号古墳埋葬施設完掘状況（北西から）
- 図版10 石井ヶ原遺跡墳墓群全景（北東から）
石井ヶ原遺跡墳墓群完掘状況（北東から）
- 図版11 石井ヶ原遺跡 S K 1 検出状況（南から）
石井ヶ原遺跡 S K 1 完掘状況（南から）
- 図版12 石井ヶ原遺跡 S K 2 検出状況（南から）
石井ヶ原遺跡 S K 2 完掘状況（南から）
- 図版13 石井ヶ原遺跡 S K 3 検出状況（北から）
石井ヶ原遺跡 S K 3 完掘状況（東から）
- 図版14 石井ヶ原遺跡 S K 4 検出状況（東から）
石井ヶ原遺跡 S K 4 完掘状況（東から）
- 図版15 石井ヶ原遺跡 S K 5 検出状況（北西から）
石井ヶ原遺跡 S K 5 完掘状況（北東から）

- 図版16 石井ヶ原遺跡S K 6 検出状況（北西から）
石井ヶ原遺跡S K 6 完掘状況（北東から）
- 図版17 石井ヶ原遺跡S K 7 遺物出土状況（南西から）
石井ヶ原遺跡S K 7 完掘状況（南西から）
- 図版18 石井ヶ原遺跡S X 1 検出状況（東から）
石井ヶ原遺跡S X 1 遺物出土状況（北西から）
- 図版19 出土遺物 I
- 図版20 出土遺物 II
- 図版21 出土遺物 III
- 図版22 出土遺物 IV
- 図版23 出土遺物 V
- 図版24 出土遺物 VI

I はじめに

高田郡高宮町内を通る一般国道433号は、広島県南西端の大竹市と県北部の三次市を結んでいる。中国山地の谷筋を縫っているため、道路幅が狭く、かつ曲折を繰り返しており、幹線道路としては近年の地域開発の推進や輸送量の増加に対応しにくくなってきた。この道路改良は人々にとって大きな願いであった。

広島県では全線の改良を順次進めることとし、高宮工区を担当する広島県吉田土木事務所（以下、「吉田土木」という。）では事業を推進するに当たり、昭和63(1988)年12月、広島県教育委員会（以下、「県教委」という。）に計画地内の埋蔵文化財等の有無及び取扱いについて協議を行った。そこで、県教委は分布調査を実施し、平成元(1989)年4月、計画地内に中・近世と考えられる石井ヶ原古墓が存在する旨を回答した。

その後、吉田土木と県教委はこの古墓の取扱いについて協議を行ったが、遺跡の近くまですでに工事が完了しており、路線変更や工法を変更することが困難なため、事前に発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。そこで、吉田土木は高宮町教育委員会（以下、「町教委」という。）とも協議し、同年10月、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下、「センター」という。）に発掘調査を依頼した。センターはこれを受けて、平成2(1990)年度に調査を実施することになり、同年8月、センターは吉田土木と委託契約を締結し、8月27日から11月16日まで発掘調査を行った。

調査の結果、古墓と考えられていた遺構は、古墳時代の積石塚（第1号古墳）であることが明らかになった。また、新たにこの古墳の南西側で古墳1基（第2号古墳）と石蓋土壇墓群、第1号古墳の北東側で石組遺構（石井ヶ原遺跡）を確認したため、吉田土木は県教委と協議してセンターに追加して調査するように依頼し、センターはこれを受けて実施した。

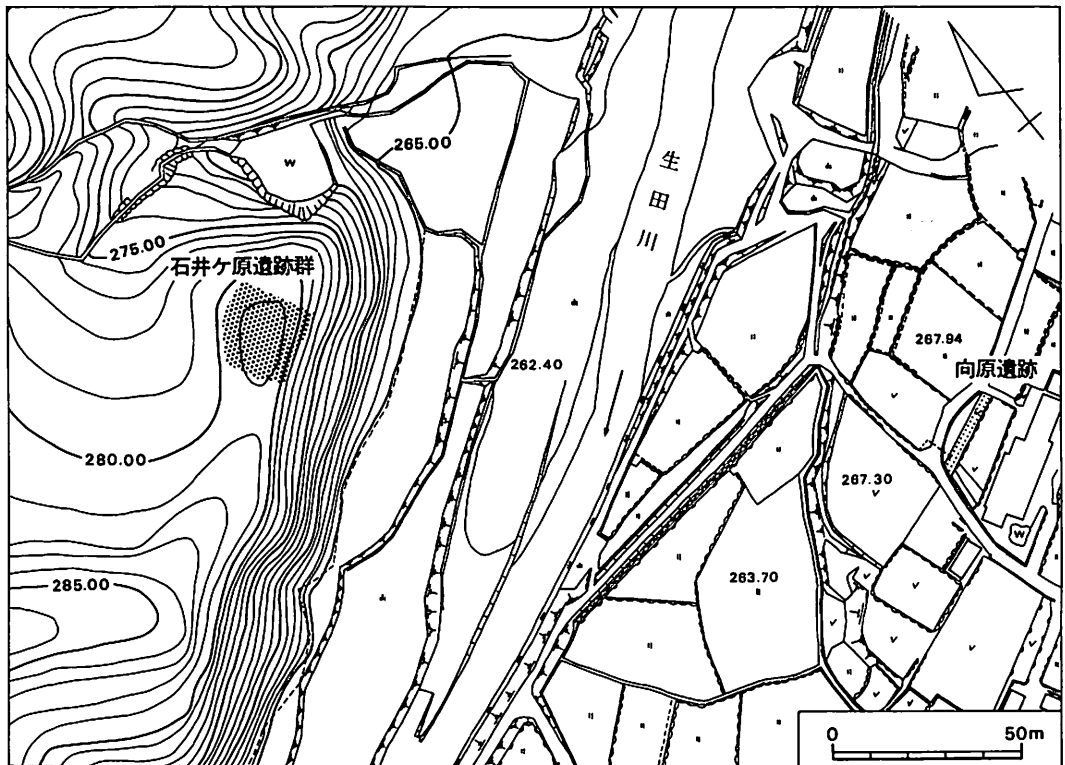
なお、平成3(1991)年3月2日には、センターと町教委の共催で遺跡報告会を開催したところ、多くの参加者があり、内容についての詳細な説明と質疑などを通して理解を深めて頂いた。

発掘調査に当たっては広島県教育委員会の指導を得るとともに、高宮町教育委員会をはじめ地元住民の方々、事業者である広島県吉田土木事務所から多大のご協力を頂いた。また、広島大学の潮見浩、川越哲志、河瀬正利の各氏からは御指導、御助言を頂いた。記して感謝の意を表します。

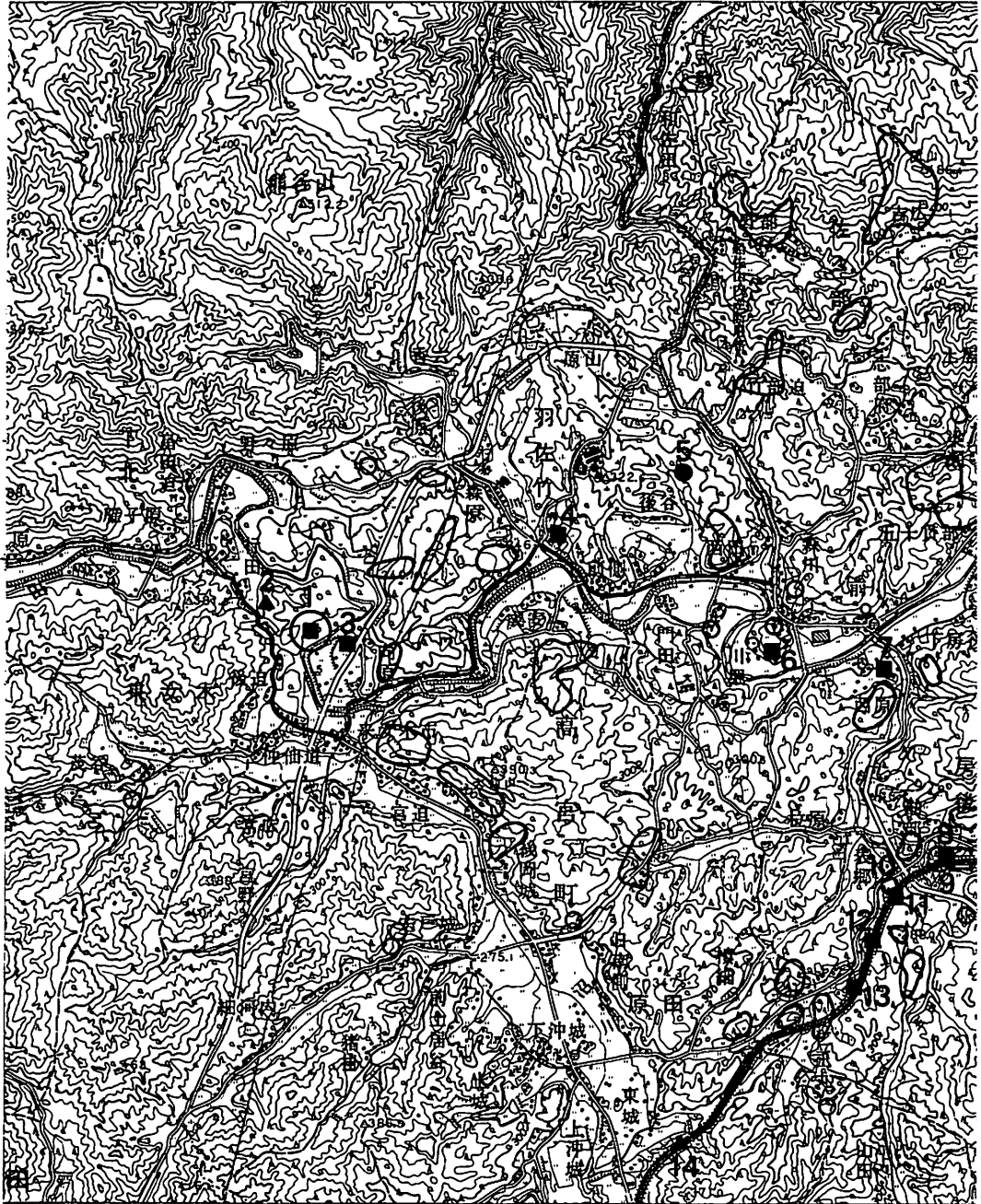
II 位置と環境

石井ヶ原遺跡群は、広島県高田郡高宮町大字来女木字石井ヶ原1427・1428-1に所在する。高宮町は県北西部にあって島根県と接し、中国山脈の脊梁部の一角を占める。町の地勢を大まかにみると、北部一帯は急峻な山々がそびえ、南部は比較的起伏の小さい丘陵地帯である。そして、これら二つの地域の間を縫うように生田川が西から東へ曲流し、日本海に注ぐ大河、江の川（可愛川）に流れ込んでいる。

高宮町に西接する美土里町から流れ込む生田川は、高宮町に入って、北東に延びたなだらかな丘陵に押し曲げられている。当遺跡群は、この丘陵の東端の小支丘上に立地する。小支丘は、東に張り出した後、北東に延びているが、生田川はこの付近で小支丘に沿って逆方向の南西に流れ、東に曲がり下っている。川底と当遺跡群の比高は約20mである。川を隔てて小支丘と対峙する東側は、南に緩やかに下る河岸段丘が形成され、現在は水田が広がっている。ここには後述する向原遺跡が立地しており、古くから良好な居住環境であったと思われる。当遺跡群からは東方一帯がよく見渡せ、向原遺跡とは指呼の間にある。



第1図 遺跡周辺地形図（1：2,000）



- | | | | |
|-----------|----------|----------|-----------|
| 1. 石井ヶ原遺跡 | 2. 行田窯跡 | 3. 向原遺跡 | 4. 八幡原遺跡 |
| 5. 後谷遺跡 | 6. 明見田遺跡 | 7. 名広遺跡 | 8. 新迫南遺跡 |
| 9. 新迫南古墳群 | 10. 白鳥古墳 | 11. 白鳥遺跡 | 12. 寸志名遺跡 |
| 13. 仁王丸遺跡 | 14. 明連窯跡 | | |

(白ヌキ:古墳・古墳群 ▲:窯跡)

■:集落跡 ●:祭祀跡

第2図 周辺主要遺跡分布図 (1:50,000 八重)

次に、第2図に示す周辺の遺跡を中心に概観してみよう。

縄文時代の遺跡は、高宮町内をみると、当遺跡群から北へ約8km離れた丘陵傾斜地に位置する杉ノ原遺跡がある。石囲いと焼土に伴って縄文時代後期の土器、磨製石斧、敲石などが出土した。山間地における数少ない縄文時代の生活跡の明らかな遺跡として、重要な位置を占めている。

弥生時代では中期の明見田遺跡、寸志名遺跡、後期の向原遺跡、八幡原遺跡、仁王丸遺跡、名広遺跡などがある。これらは生田川に面した微高地だけでなく、小河川沿いのゆるやかな傾斜地にもみられ、小規模な集落が点在していたことが窺える。そして、いずれの遺跡も可耕地を伴っており、水田経営を基盤にした集落跡と考えて間違いなかろう。なお、向原遺跡は平成元(1989)年、120㎡の発掘調査が実施され、弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡などが検出され、多数の土器が出土した。また、中期の新迫南遺跡では土壙墓、石蓋土壙墓、箱形石棺と、これらに関連する溝状遺構、石列、石組などが検出された。さらに、白鳥遺跡で採集された中期の土器も遺跡の立地などから埋葬に伴ったものと考えられ、石蓋土壙墓群・土器棺墓は後期後半に位置付けられている。

古墳時代に入ると遺跡数は増大し、分布の広がりもみられる。特に古墳は、可耕地を望む丘陵上や丘陵先端部に築かれており、古墳群を形成しているものもある。墳形をみると白鳥古墳が前方後円墳(全長19.7m)、新迫南第2号古墳が方墳(一辺12m)のほかは円墳と考えられている。埋葬施設としては、前半期の古墳には竪穴式石室、箱形石棺、土壙などがあり、後半期の古墳には横穴式石室のほか竪穴式石室、箱形石棺もある。古墳以外には、寸志名遺跡(集落跡)、名広遺跡(集落跡)、後谷遺跡(祭祀跡)、行田窯跡、明連窯跡などがある。

当遺跡から西方の地域はほとんど遺跡が確認されていないが、居住に適した所もあり、今後発見される可能性が極めて高く、この一帯は弥生時代中期以降、遺跡が散在的に立地を始め、古墳時代には多数の集落が形成されたものと考えられる。

参考文献

高田郡町村会『高田郡史』上巻 昭和47(1972)年

高田郡高宮町『高宮町史』 昭和51(1976)年

広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 昭和54(1979)年

高宮町教育委員会『向原遺跡発掘報告会資料』 平成元(1989)年

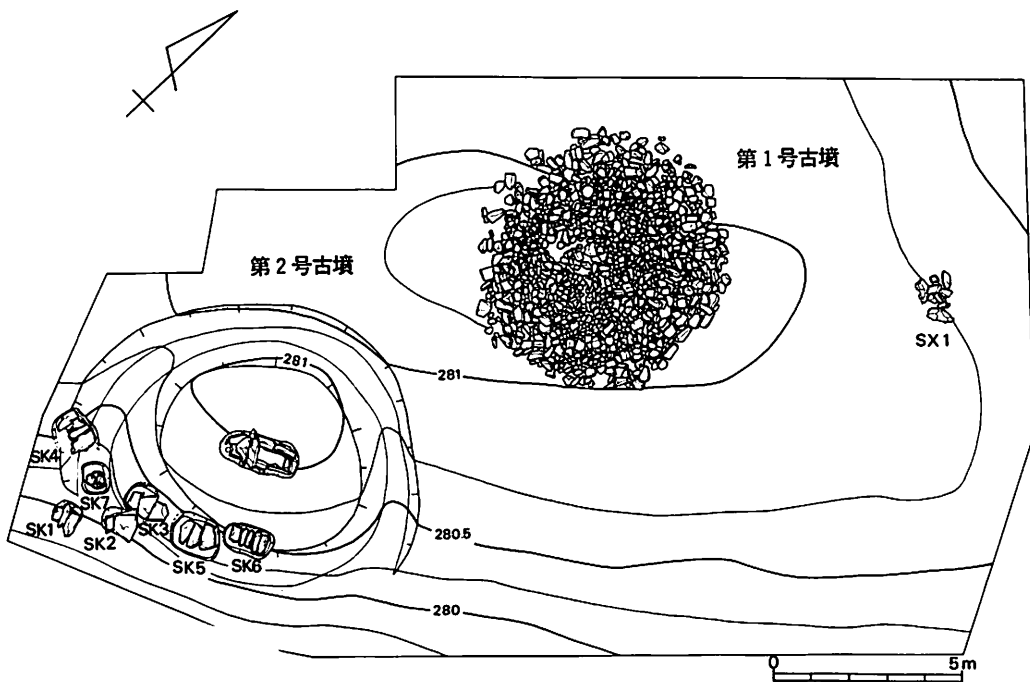
III 調査の概要

本遺跡群は、石井ヶ原第1号古墳、同第2号古墳、石井ヶ原遺跡からなり、南流する生田川の右岸に位置し、南西から北東に延びる丘陵尾根の南東側斜面につくられている。当初第1号古墳は、中世の古墓と考えられていたが調査を進めるなかで須恵器のみが多数出土したため、この地域では初の古墳時代の積石塚であることが明らかになった。

第1号古墳は、河原石を積み上げた円形の積石塚で、径約7m、高さ約1mの規模である。調査当初に埋葬施設と推定していた墳丘の窪みは、壁面、底石の状況や遺物の出土状況から考えて、盗掘坑であることが明らかになった。埋葬施設は、墳丘全体を最下部の石まで下げたところ、ほぼ中央から鉄剣が出土し、この部分が埋葬施設にあると推定できた。遺物のほとんどは須恵器の破片で、積石の間などから出土している。

第2号古墳は、第1号古墳の南緩斜面に位置している。調査の結果、周溝を持つ円墳で、墳丘の規模は径約7.2m、埋葬施設は箱形石棺であることが明らかになった。遺物は周溝の西半から多量の須恵器片と数片の土師器が出土した。

石蓋土墳墓群は、6基の石蓋土墳墓と1基の土墳墓から構成され、その一部は、第2号古墳の墳丘下で確認した。いずれも小型のもので、小児埋葬と考えられる。



第3図 石井ヶ原遺跡群配置図 (1:200)

IV 検出遺構

1 石井ヶ原第1号古墳

本古墳は、南西から北東に延びるなだらかな丘陵尾根の先端部に位置し、丘陵尾根はわずかに南北方向に傾斜しているが、墳丘に築造した丘陵頂部は、地山に暗茶褐色土（第4層）が堆積してほぼ平坦な地形をしている。当初、薄い黒褐色の表土面に河原石の存在が認められる程度であったが、高まりの中心からやや南西によった位置でN46°W方向の窪みを検出した。この窪みは面の状況や遺物の出土状況などから竪穴式石室の可能性も考えられたが、埋葬施設とすることはできなかった。墳丘を最下部の石（「基底石」とする。）の上面まで下げたところ、墳丘ほぼ中央から鉄剣が出土した。鉄剣周辺には側石と思われる河原石が配置されており、埋葬施設であることが明らかになった。墳丘は円墳状に築造された、盛土を用いない積石塚であることも明らかになった。墳丘の最も高いところで標高282mである。

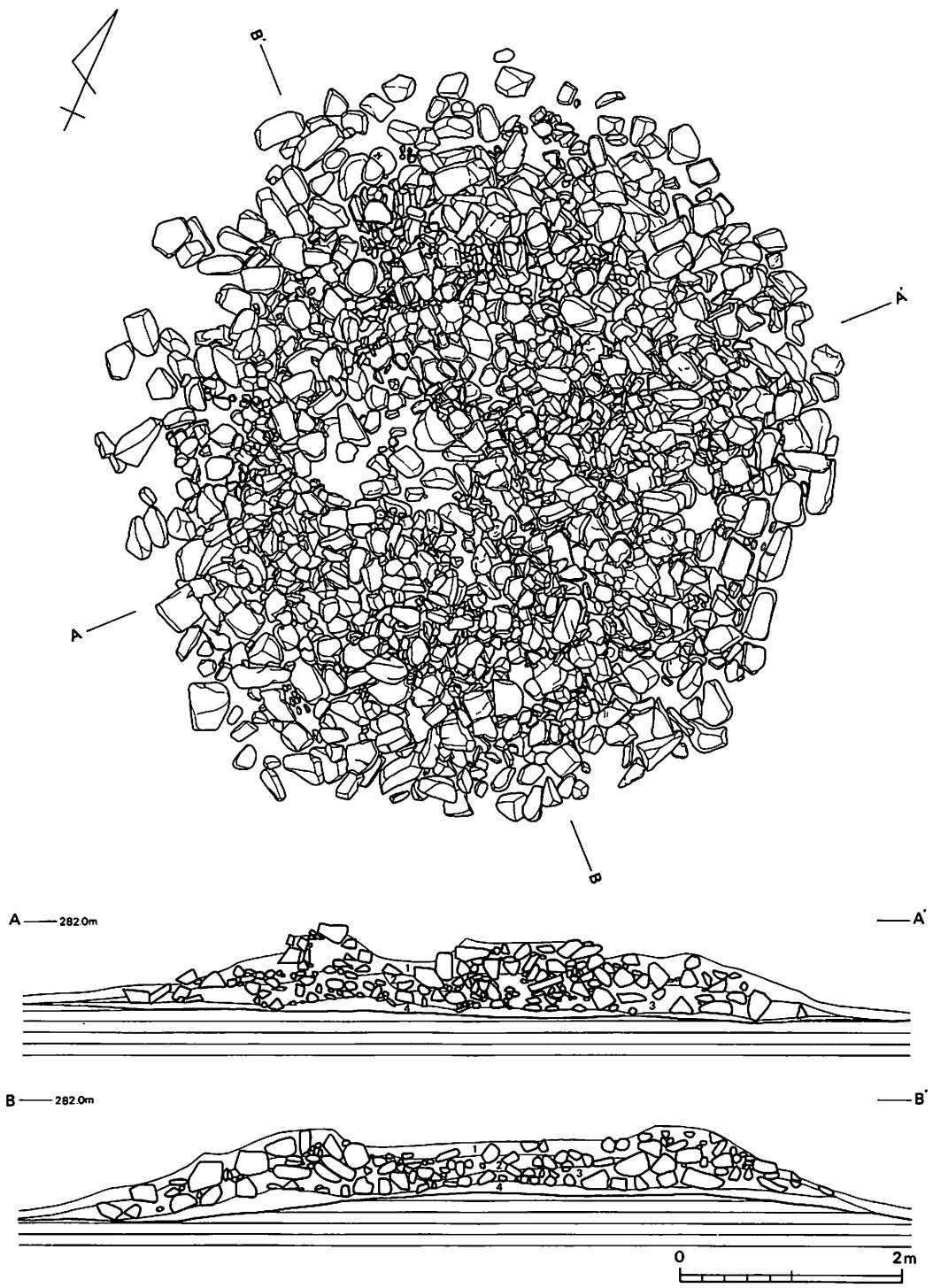
(1) 墳丘

墳丘の規模は、径が約7m、高さ約1mで周溝は造られていない。

墳丘は、丘陵頂部の地山面に10～20cmの暗茶褐色の堆積土（第4層）があり、墳端には40～50cmの河原石を環状に並べていた。河原石の大部分は、長辺を連ねていた。石列は樹根によって攪乱を受けた南西の一部を除き、概ね墳丘中心から半径約1.8m・約2.4m・約2.7mの3列が確認できる。最も外側の第4列と推定される石列は、大半が周辺に崩落・流失していた。

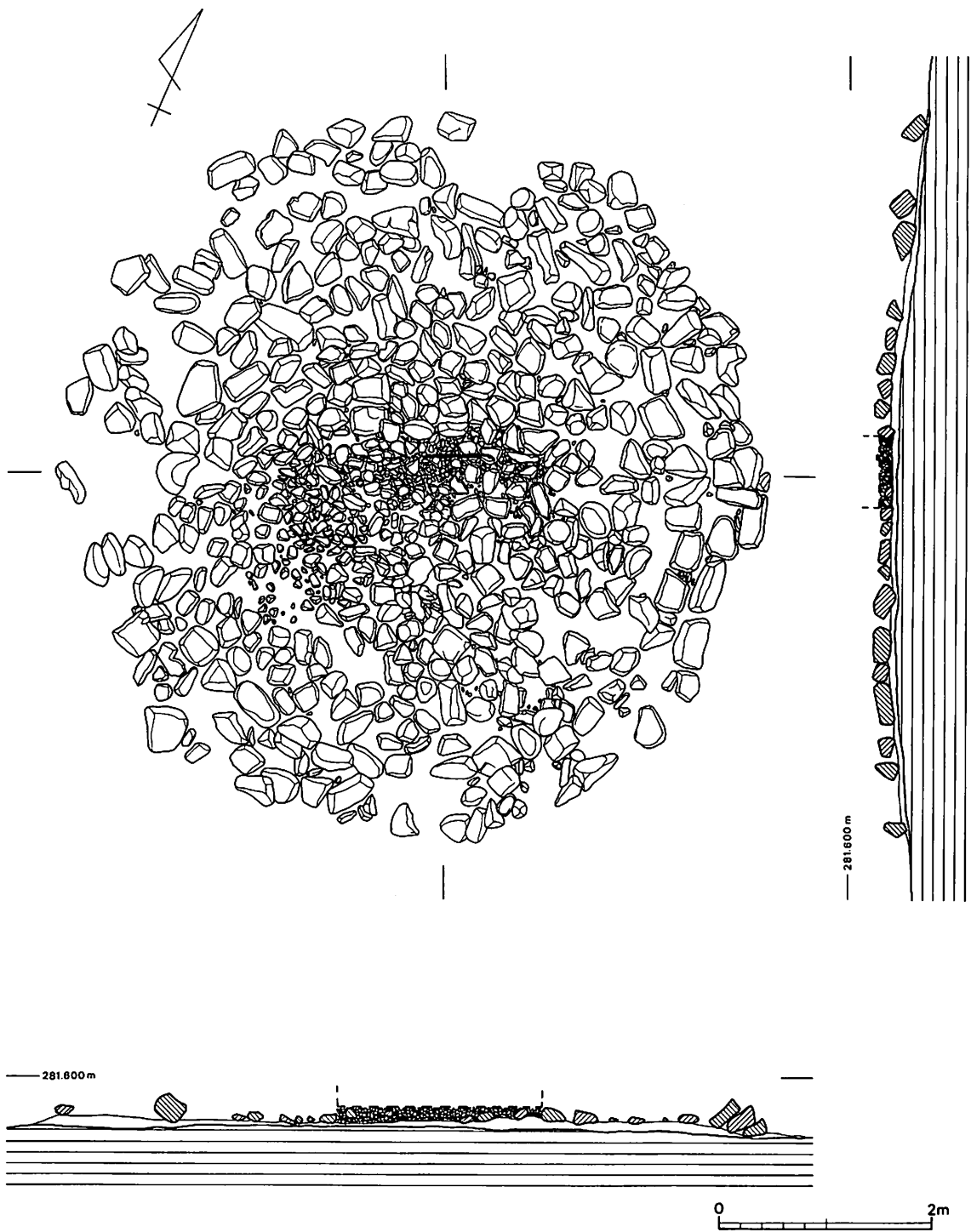
墳丘中央部には、長さ約1.9m、幅約0.7mの範囲を取り囲むように埋葬施設の側石と思われる石材が置かれていた。この部分の長軸方向はN66°Eを指向している。側石と思われる石材の内側には10～25cmの円礫があり、その隙間には10cm未満の小円礫が敷き詰められていた。なお、石材の隙間は、暗黄褐色土（第3層）で埋まっていた。

埋葬施設を被覆していたと思われる石材は、暗茶褐色の堆積土（第4層）直上から墳丘中心で30～40cm、墳裾に向かっては10～20cmの高さに任意に積まれ、その隙間には淡黄褐色土（第2層）と暗黄褐色土（第3層）が埋まっていた。第2層は、当初埋葬施設と考えられた窪み付近の埋土である。第3層は、その窪み周辺から墳丘全域の石材の隙間を埋めた土である。これらの土層には土質による違いは見られなかった。石材の大きさは40～50cmの大きな石から20cm前後の石が使用されていた。さらに、墳丘上面までは20～40cmの石が多く使用され（第1層）、その石材の隙間には5～25cmの石を詰め込み石材の崩落を防いでいた。第1層の上には、黒褐色の表土が薄く覆っていた。



1. 黒褐色土 2. 淡黄褐色土 3. 暗黄褐色土 4. 暗茶褐色土

第4図 石井ヶ原第1号古墳墳丘実測図 (1:60)



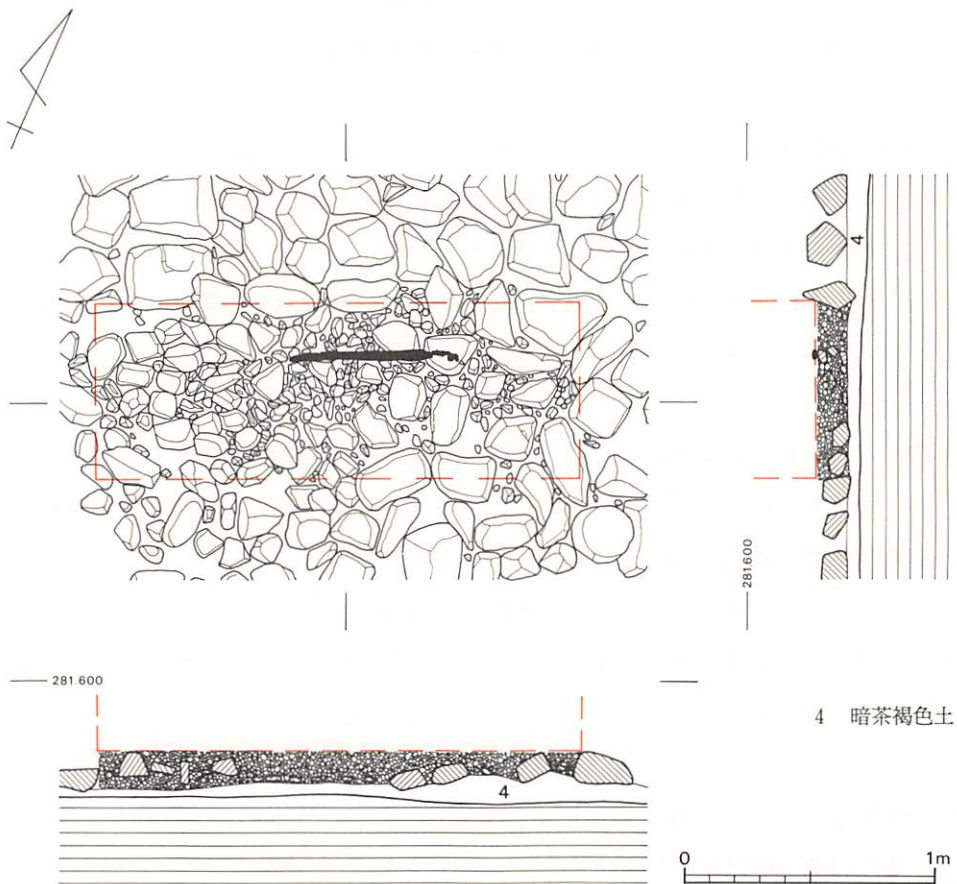
第5図 石井ヶ原第1号古墳基底石実測図(1:60) 破線:推定埋葬範囲

(2) 埋葬施設

当初、考えられた埋葬施設は、N46°W方向の長さ約2.9m、幅約0.9m、深さ約0.15mの窪みであった。窪み側面の石は、石材の小口面を内側にして積み上げられた状況がうかがえた。

この窪みの北側からは遺物が集中して出土した。その出土状況からは、埋葬施設が何らかの人為的行為によって攪乱を受けた時に移動したものと考えられた。しかし、床面と考えられる最下部の石まで調査を進めたところ、窪みのやや北よりの部分は、南東側より小さい石が据えられ、間に円礫が詰められていた。

さらに全体を基底石まで積み石を取り除いた時点で、N66°E方向の石列が認められ、床面と思われる円礫の直上から鉄剣が出土した。このN66°E方向を長軸として囲まれた石列の範囲が本古墳に伴う埋葬施設であることがわかり、当初埋葬施設として考えていた窪み



第6図 石井ヶ原第1号古墳埋葬施設実測図 (1:30)

は埋葬施設に関わりのないものである事が明らかになった。そして、窪みの北側に置かれていた円礫は、埋葬施設の床面の一部であったことが判明した。

基底石部において埋葬施設の側石は、内法で長さ約1.9m、幅約0.7mの範囲に置かれていた。長軸方向はN66°Eで平面形態はほぼ長方形である。内側には10～25cmの円礫が任意に置かれ、その隙間には10cm未満の小円礫が厚さ10～15cmほど敷き詰められていた。

なお、円礫の隙間は、暗黄褐色土（第3層）で埋まっていた。

埋葬施設の北側から出土した鉄剣の切先の方向が南西であることから頭位は、北東の可能性が考えられる。

埋葬施設の側石外側の石のうち北側では、小口面を内側にした2列の石列が認められ、これらの石列は埋葬施設を補強するものと考えられる。南側も同様に2列の石列があったと考えられるが、1列を明らかにできただけである。

東側の小口部の石は、側石外側では主に小口面を内側にした20cm前後の石が3～5個ほど2列置かれていた。西側の小口部は樹根による攪乱が著しい部分であるが、10cm前後の円礫を石列に用いていた。これらの石列に用いた石材は概ね平坦な面を上側にして置いていた。

埋葬施設の側石面から最も内側の環状の石列までの間には、北側で20～40cmの石が任意に置かれ、南東側でも15～40cmの石が任意に置かれていたが、南西側は、樹根による攪乱を受けていたため当初の形状は明確にできなかった。

基底石より上部における埋葬施設の構造は、石積みの状況から側壁としての積み上げは確認できず明らかにできなかった。

(3) 遺物出土状況

本古墳から出土した遺物は、須恵器（杯蓋・杯身・高杯・甕）の破片が大半を占め、埋葬施設を中心にその周囲から出土している。このほか、小円礫の床面直上から鉄剣が出土し、北側墳裾下層から砥石が出土した。

第7図は、第1号古墳と第2号古墳の遺物出土状況である⁽¹⁾。

第1号古墳の出土須恵器には個体的なまとまりは見られないが、器種別に分布をしているようである。杯蓋・杯身は主に墳丘中心部の埋葬施設、及びその周辺の北西部に最も多く集中している。

高杯は埋葬施設の北側に偏って出土している。

甕は、墳丘の北西側に集中している。

なお、本古墳から時期差のある須恵器が出土しており、一片のみではあるが本古墳の暗

黄褐色土（第3層）から出土した須恵器片が、第2号古墳から出土した高杯（第23図39）の脚部に接合している。

第8図は、第1号古墳南東側から見透した、器種別の遺物出土状況である。⁽²⁾

第8図-1は杯蓋・杯身の出土分布を示したものである。墳丘の黒褐色土（第1層）や暗茶褐色土（第4層）からも出土しているが、大半の破片は暗黄褐色土（第3層）から出土している。また、第7図に見られる墳丘中心部からの出土であることが確認できた。

第8図-2は、杯蓋（第19図6）の出土状況である。第3層の上層に集中している。

第8図-3は、杯身（第19図16）の出土状況である。第3層の下層に集中している。

第8図-4は、高杯（第19図19）の出土状況である。これは、杯蓋・杯身と同様の第3層から主に出土しているが、一個体のものでは広い範囲に分布している。

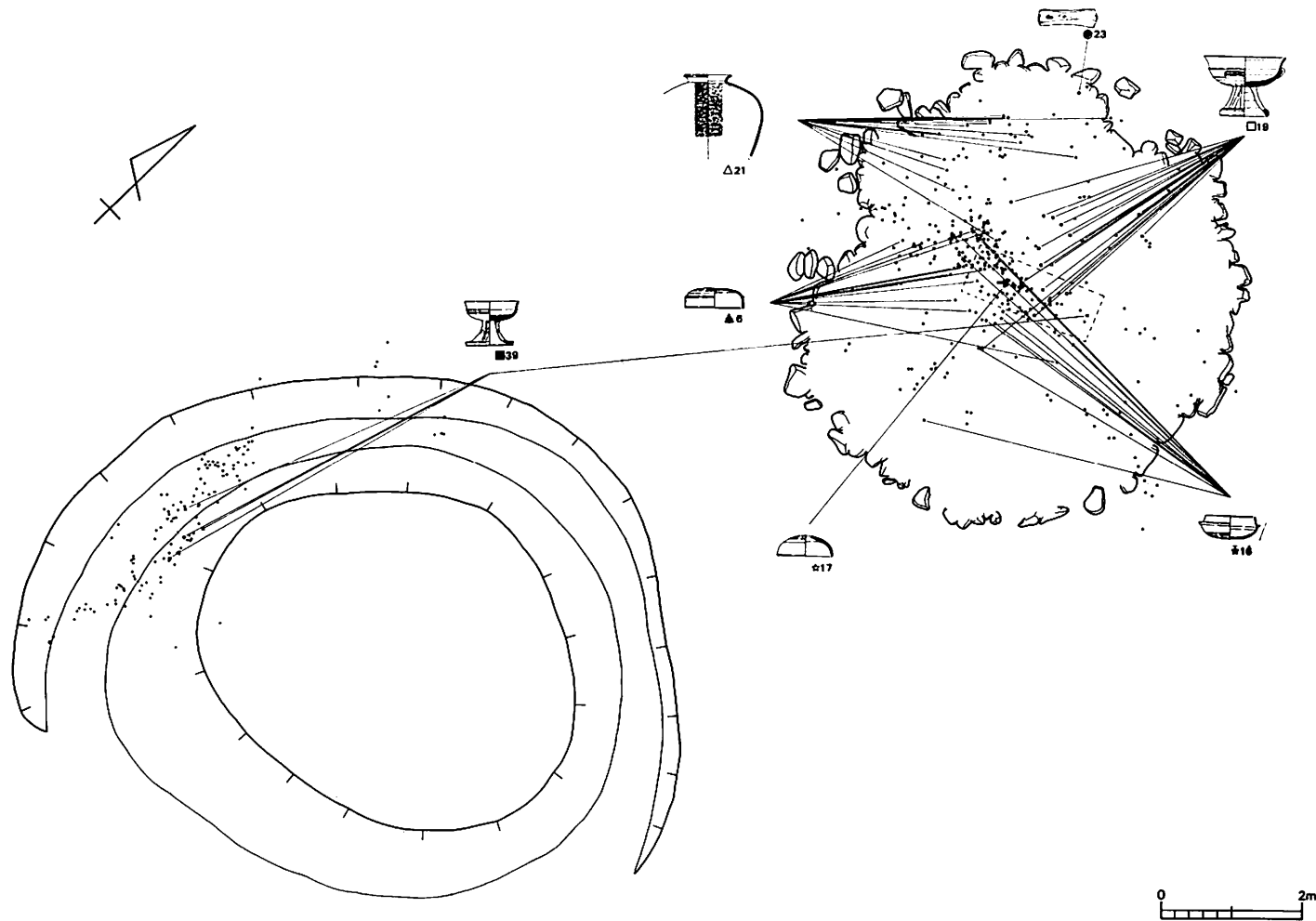
第8図-5は、甕（第20図21）の出土状況である。これは、暗茶褐色土（第4層）から大半が出土し、暗黄褐色土（第3層）から出土したものはわずかである。出土範囲は、墳丘の北東側に集中している。

鉄剣（第21図24）は、柄の先がN66°E方向をむき、土圧による湾曲が中央部に見られたが、主体部北側中央の礫床面直上の暗黄褐色土の中からはほぼ水平の状態出土した。また、柄の部分が6個に折れていたほか、剣先が折れた状況であった（第6図）。

砥石（第21図23）は、北側墳裾下層の暗茶褐色土（第4層）直上から出土した。

註

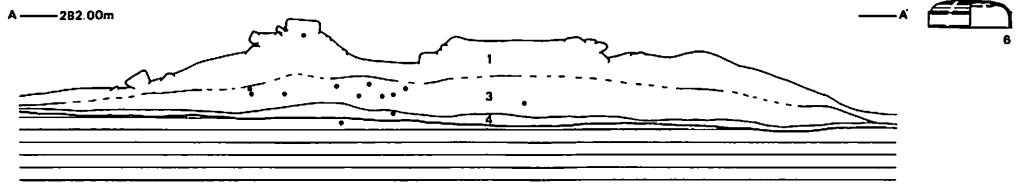
- (1) 遺物の出土地点を示し、接合関係を明らかにする目的で本古墳群から出土した遺物の代表例をあげたものである。遺物の縮尺は不統一である。
- (2) 南東側からの見透しによるため、出土遺物の一部が地山から出土しているようになっているが、いずれも第4層からの出土である。



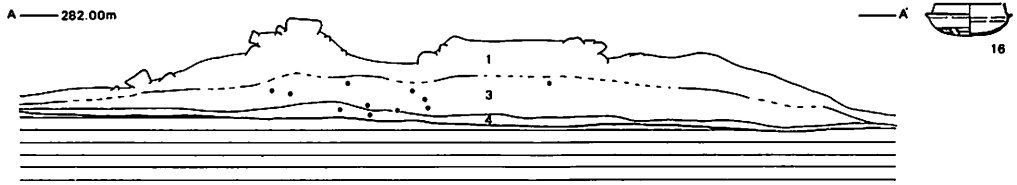
第7図 石井ヶ原第1・2号古墳遺物出土状況(1:100)



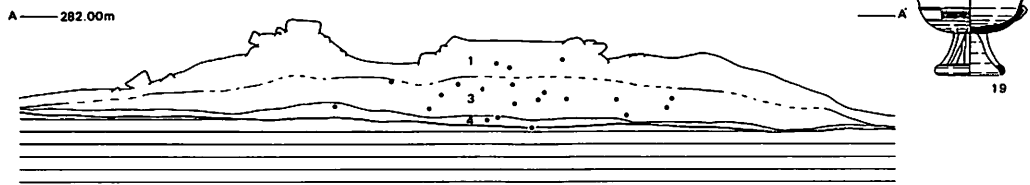
1 杯蓋・杯身出土状況



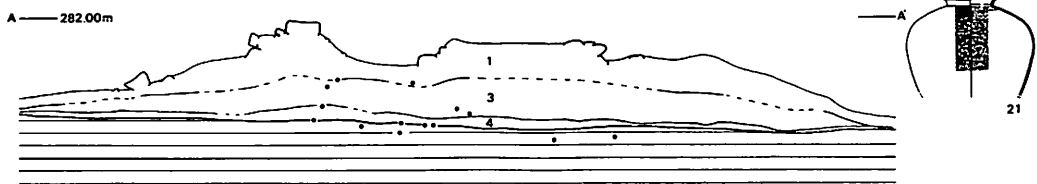
2 杯蓋出土状況



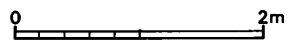
3 杯身出土状況



4 高杯出土状況



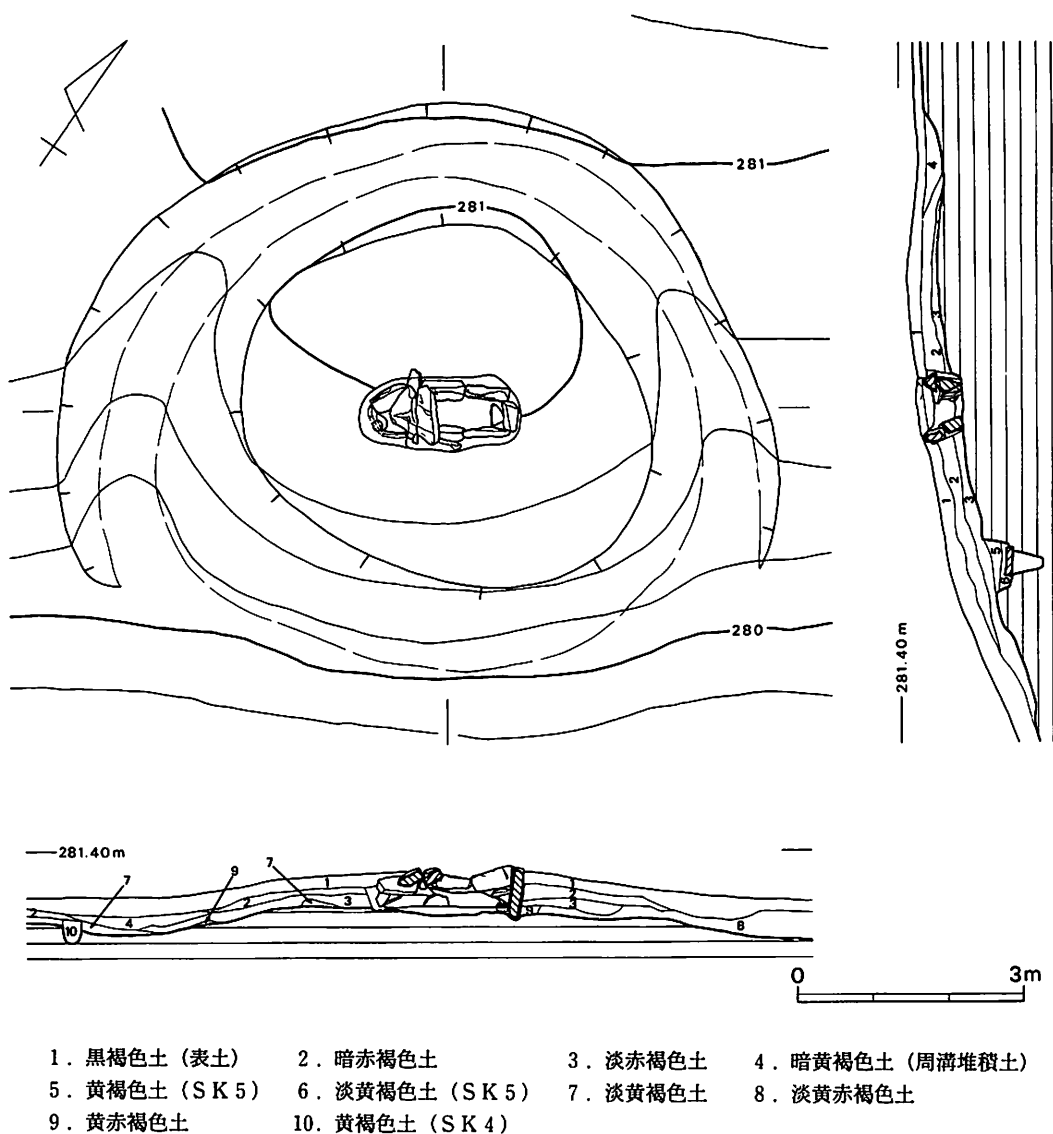
5 壺出土状況



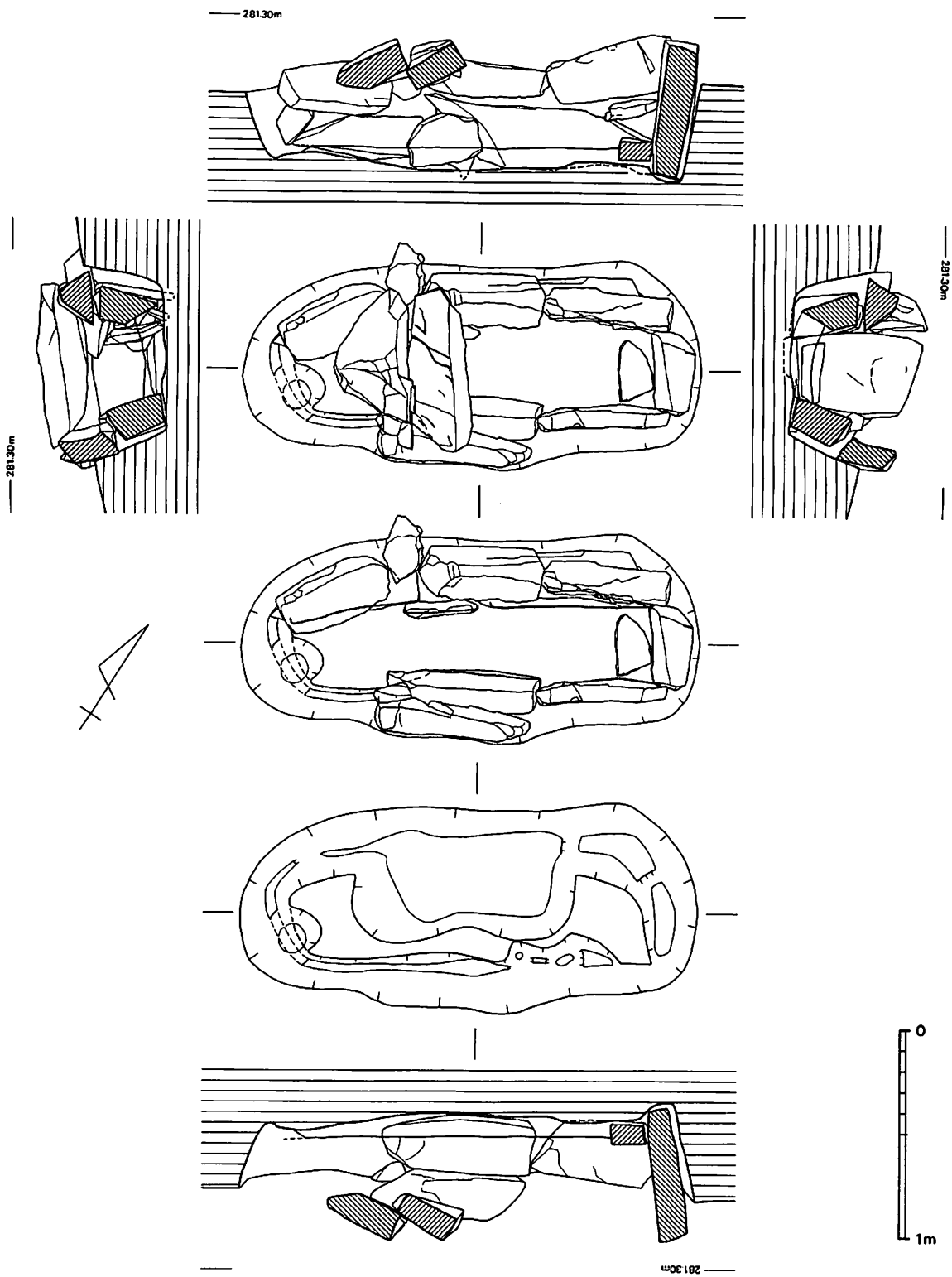
第8図 石井ヶ原第1号古墳出土遺物垂直分布図 (1:60)

2 石井ヶ原第2号古墳

第2号古墳は、第1号古墳の南側に位置し、第1号古墳墳端と本古墳の周溝外側の端との間隔は約2.6mである。本古墳は、南西から北東方向に延びた丘陵尾根の南東側緩斜面に築造された円墳である。樹木の伐採前には古墳の確認が困難であったが、伐採後に僅かな高まりと周溝の窪み、及び埋葬施設の石材の一部が確認できる状態になった。標高は墳丘の最も高い所で281.2mである。



第9図 石井ヶ原第2号古墳墳丘実測図 (1:100)



第10図 石井ヶ原第2号古墳埋葬施設実測図 (1 : 30)

(1) 墳丘

古墳は、丘陵緩斜面の高所側をC字状に掘り込んで周溝をつくり、斜面下方側は地山整形を行い、低い円形の台状部を造り出し、その上に盛土を行って墳丘を築成している。古墳は斜面に立地しているため、盛土はかなり流失しており、埋葬施設の石材が露出するとともに一部失われていた。盛土は2層確認でき、どちらも赤褐色土系の粘質土で、旧表土は土層観察から確認できなかった。

墳丘の規模は、径が約7.2m、高さが北西周溝底から約0.5m、斜面下方側の裾から約1.5mであるが、本来はもう少し高さがあったものと考えられる。周溝の規模は、幅1m前後、高所側での深さ約0.2mである。

周溝の西半部から多くの須恵器（第22～26図）と少量の土師器が出土している。これらは埋土の下層から溝底にかけて破片の状態出土しているが、個体的なまとりまでの出土状況は見られなかった。

(2) 埋葬施設

墳丘頂部平坦面のほぼ中央に尾根筋に平行（北東－南西方向）してつくられている箱形石棺である。石棺の石材は、両端の蓋石と南西小口石、及び南東側石の一部が抜き取られていた。なお蓋石は2枚残存していたが、石棺内へ一部落ち込んでいた。北東部の小口石は、1枚の平石を縦長に用いている。側石は平石を横長に用い、二段に積み重ねられ、一般的な石棺の構築法とは異なる^(註)。

石棺は、横長の平石を広口積みにしているため安定が悪く上開きになっていた。規模は南西小口石が失われているため詳細は不明であるが、内法で長さが約1.75mと推定され、幅が北東小口部で0.35m、中程で約0.3mであり、南西小口部に向って狭くなっている。深さは北東小口部で約0.55m、中程で約0.4mである。床面は一部攪乱を受けているが、北東小口部には枕石と考えられる平石がみられる。石棺の掘り方は隅丸長方形を呈し、長さ約2.2m、幅約0.95mの規模である。石棺は掘り方のほぼ一杯に構築されている。この掘り方は、盛土部を掘り込み、地山を僅かに掘り込んでいるだけである。

頭位は枕石と考えられる平石がある北東側と考えられ、主軸の方向はN57°Eである。遺物は出土していない。

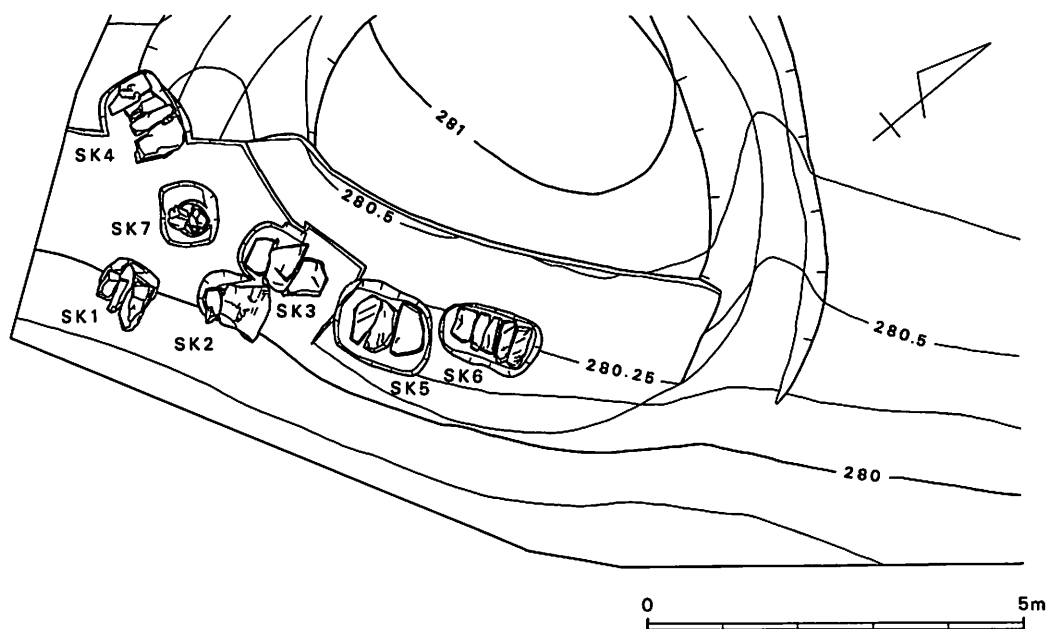
註 小型竪穴式石室の可能性もある。石室と石棺の区別として便宜上側壁の石材の積み方によって上下に積み重ねたものを石室、横に並置するにとどめたものを石棺とする。（水野清一・小林行雄『図解考古学辞典』創元社 昭和34(1959)年）

3 石井ヶ原遺跡

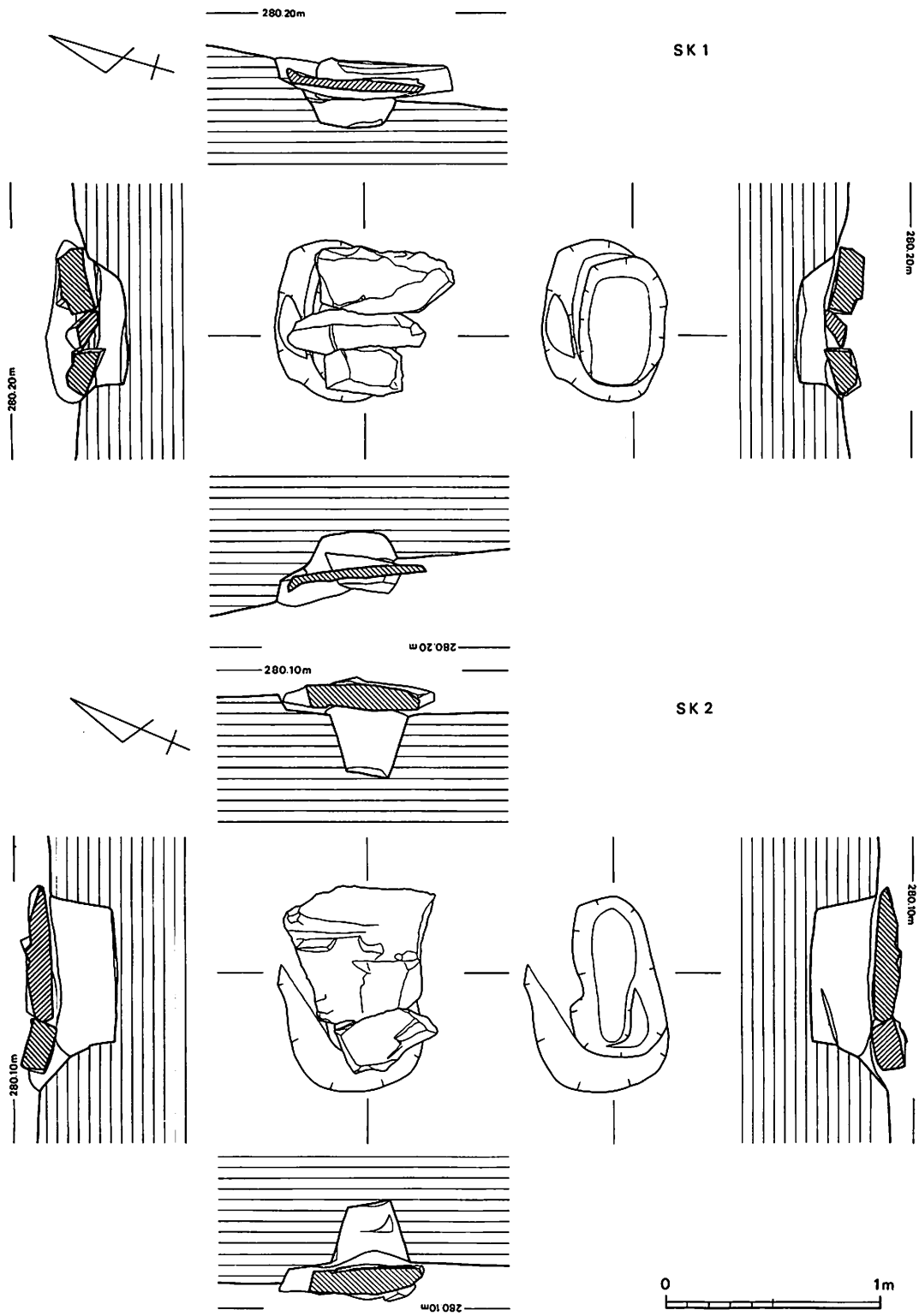
(1) 墳墓群 (SK1~7)

丘陵の南東側傾斜交換部にあたる第2号古墳の墳丘南裾部を中心に、6基の石蓋土墳墓 (SK1~6) と1基の土墳墓 (SK7) が等高線にそってつくられている。これらの東寄りのものは第2号古墳の墳丘盛土下で確認した。この墳墓群は、SK7のみが形態的に異なるが、SK1~4に囲まれており、また、配列的にみても同じ一群に含まれるものと考えられるため、ここでは土墳墓とした。

石蓋土墳墓は、本来二段の土墳で、一次墳の底に蓋石を置く構造のものであったと考えられるが、一次墳の土墳壁が全周するのはSK5・6のみである。そのほかのSK1~4は第2号古墳の築造にともなって一次墳の一部が壊されたものと考えられる。これらの配置は規則的で、SK4がやや長軸方向を異にするものの、そのほかの5基は長軸方向がほぼ等高線に並行してつくられている。SK2とSK3は一部重複し、SK2がSK3に先行する。蓋石は2~5枚であるが、大きな平石を使用したものと比較的幅狭な平石を使用したものがある。二次墳の平面はほぼ隅丸長方形であるが、SK4の二次墳には両小口に段があり、底面も他に比べて平坦でなくやや窪んでいる。規模においては、底面の長さ



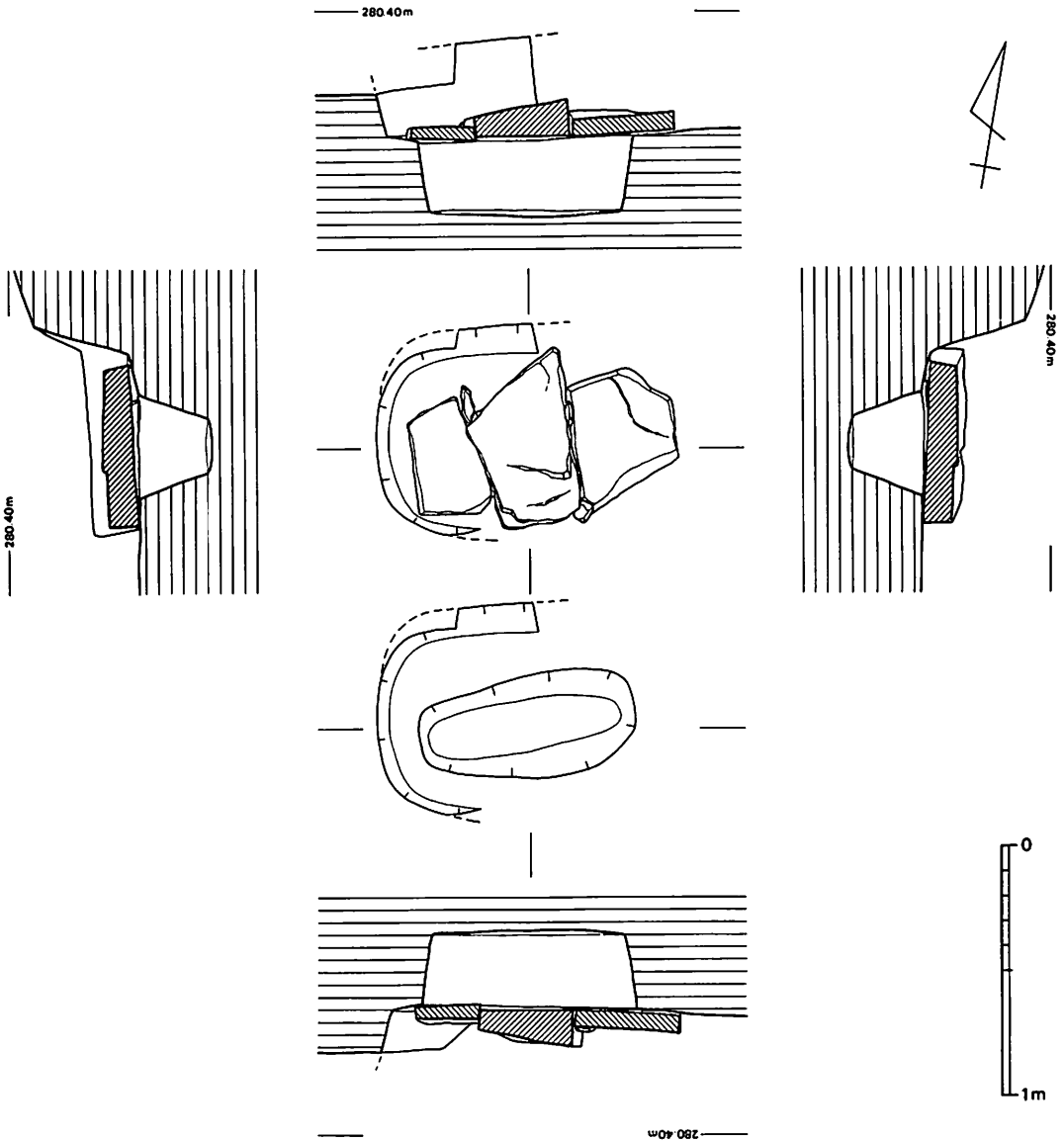
第11図 石井ヶ原遺跡墳墓群配置図 (1:100)



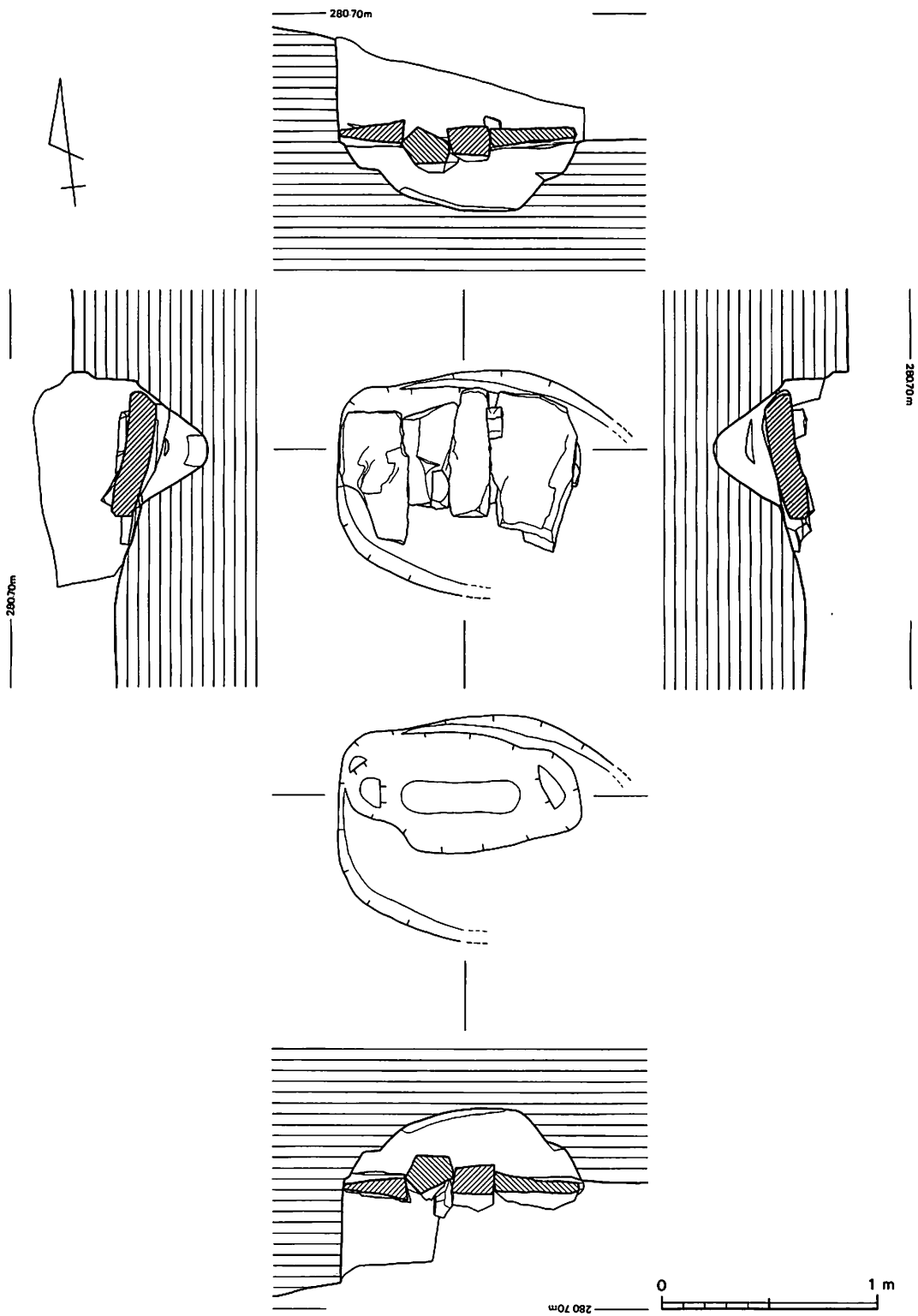
第12図 石井ヶ原遺跡SK 1・2実測図(1:30)

が55cm前後と80cm前後との二つに分かれる。頭位は底面の幅が広い略東側と考えられ同一方向である。遺物は出土していない。各石蓋土墳墓の規模は第1表の通りである。

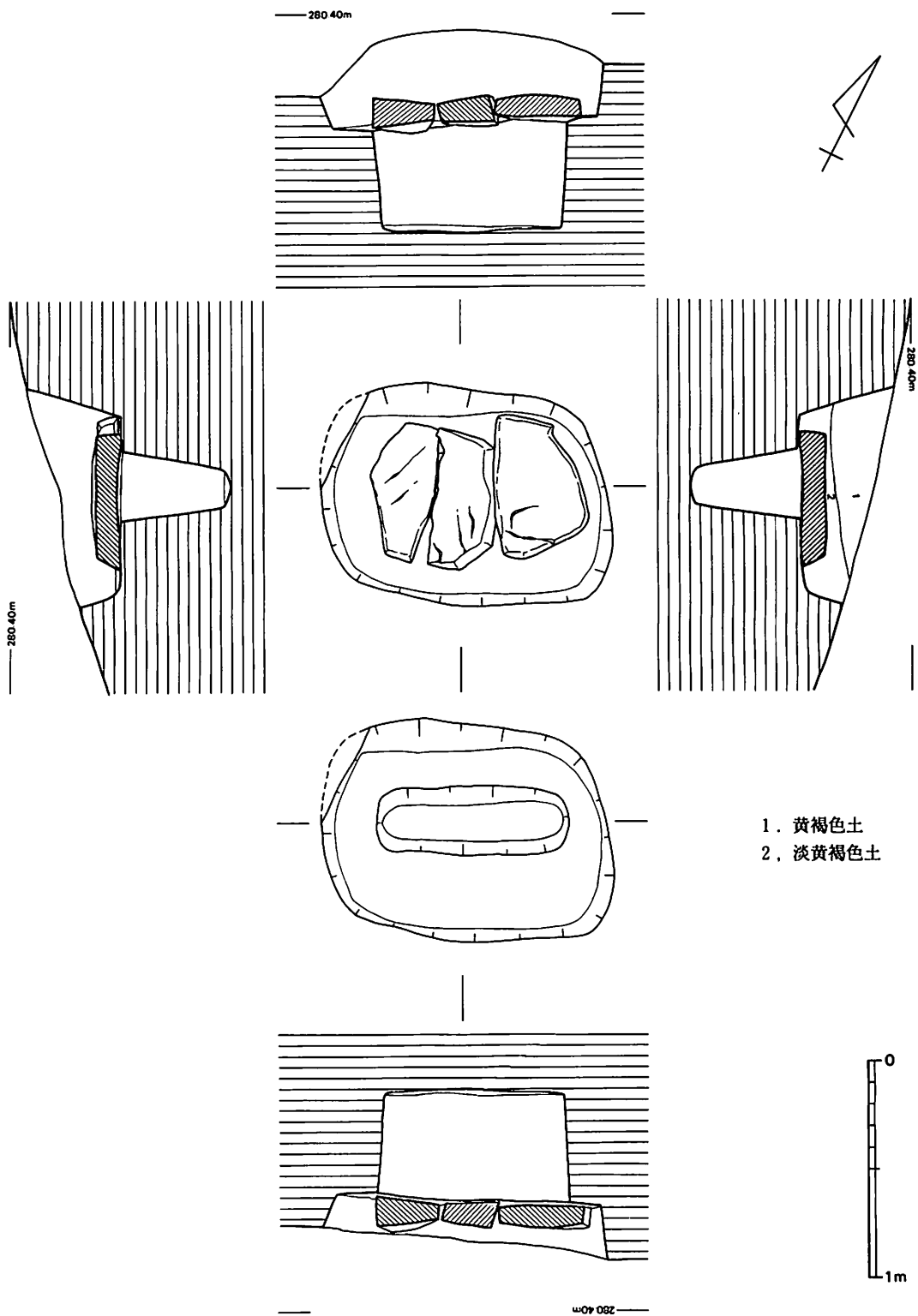
S K 7 は二段掘りの土墳である。一次墳は略方形、二次墳は円形であるが、二次墳は一次墳の北壁に接し偏っている。一次墳の規模は、上端面が86×72cm、下端面が77×53cm、深さが10cmであり、二次墳の規模は、上端面が48×44cm、下端面が43×34cm、深さが10cmである。主軸の方位はN119°30′Eである。土墳の直上には礫3個がありその下から杯蓋1



第13図 石井ヶ原遺跡S K 3 実測図 (1 : 30)

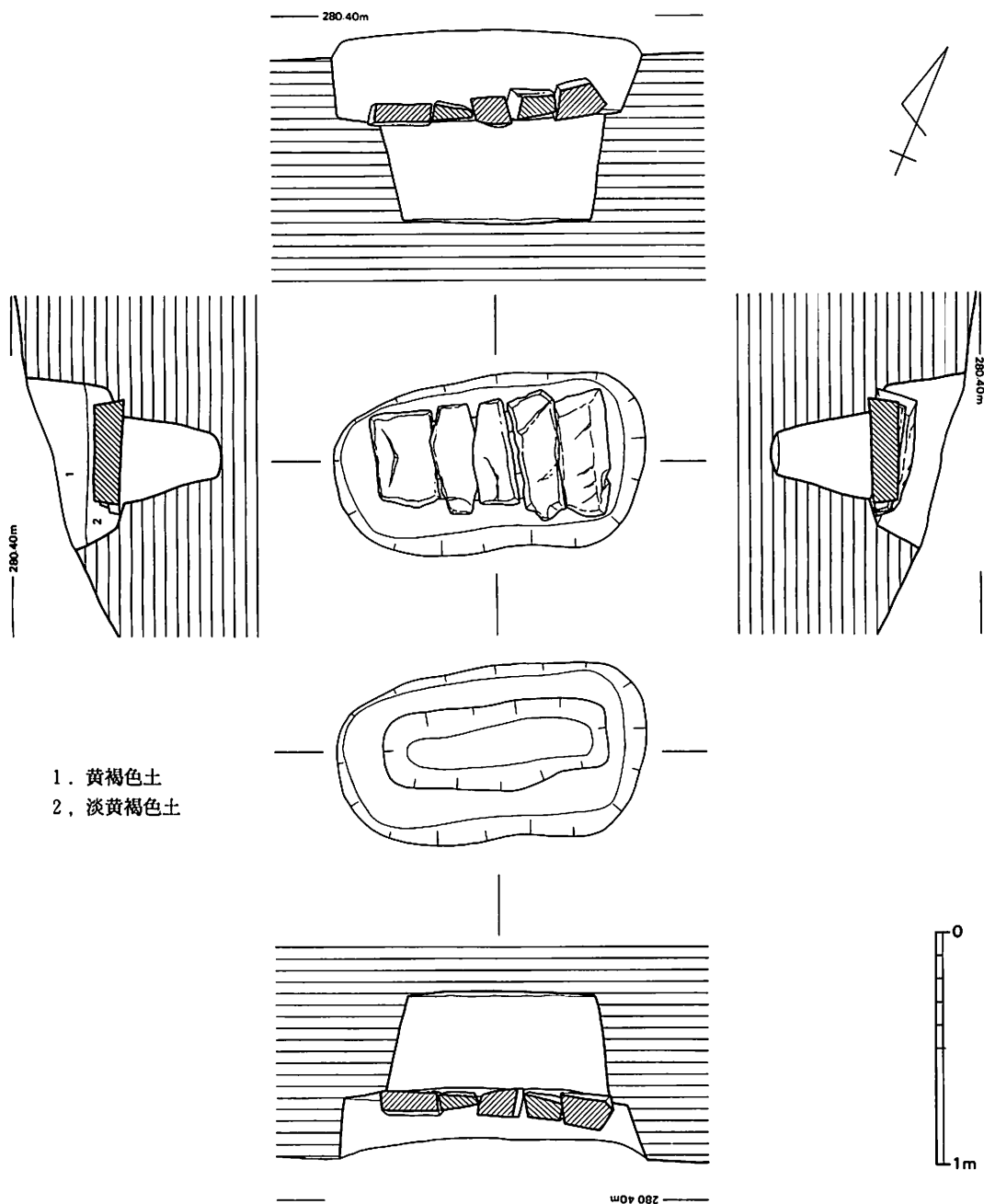


第14図 石井ヶ原遺跡SK 4 実測図 (1 : 30)

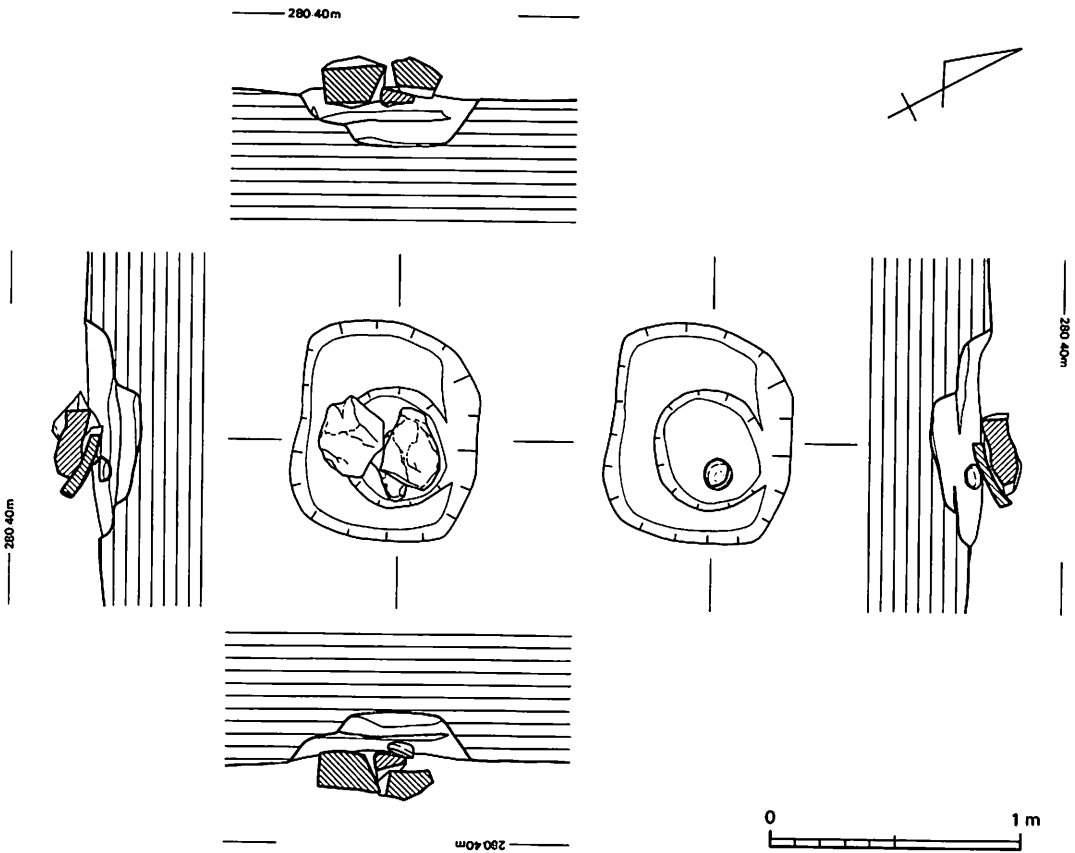


第15图 石井ヶ原遺跡S K 5 実測図 (1 : 30)

点（第27図）が口縁部を上に向けて出土している。本土墳は、SK 1～6とは形態的に異なるものの土墳墓と考えられる。



第16図 石井ヶ原遺跡SK 6 実測図（1：30）



第17図 石井ヶ原遺跡S K 7実測図 (1 : 30)

第1表 石蓋土墳墓一覧

(単位: cm)

	規 模								主軸方位	蓋 石 枚 数	備 考
	一段目			二段目							
	上 端		深 さ	上 端		下 端		深 さ			
長さ	幅	長さ		幅	長さ	幅					
S K 1			10	59	39	50	28	16	N73°E	3	一部二段土墳
S K 2			11	75	37	62	20	30	N67°E	2	一部二段土墳
S K 3			38	87	42	78	21	30	N71°E	3	一部二段土墳
S K 4			40	109	55	55	14	32	N96°30'E	4	一部二段土墳 両小口部に段あり
S K 5	132	100	44	90	32	84	17	50	N63°30'E	3	二段土墳
S K 6	135	75	35	97	38	81	18	45	N61°30'E	5	二段土墳

(2) 石組遺構 (S X 1)

本遺構は、第1号古墳の墳端から北東に約5m離れた地点に位置する。調査前は周辺の状況と同様で地形の盛り上がりなどもなく、地山の風化の過程で残存したと思われる角礫状の石の一部が表土から露出している状況であった。ところが表土を除去したところ、角礫のほかに円礫も検出され、石組の遺構であることが明らかになった。

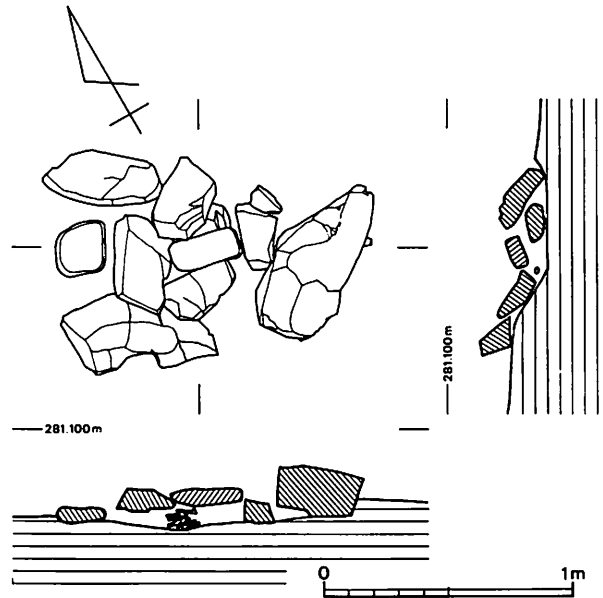
石組は、北隅と西隅と南東端に長さ50~70cmの比較的大きな石を配し、間に長さ20~40cmの角礫と円礫が重なっていた。なお、石組の中心

の円礫は長さ28cm、幅12cm、厚さ6cmの平石であるが、その直下から須恵器甕の口縁部(第28図70)を割った破片(約6×10cm大)の6片が重なって出土した。また、同一個体と考えられる口縁部の破片が石組内や周辺からもわずかではあるが出土した。

石組の当初の形状は明確でないが、北隅と西隅の石、及び北隅から2番目の石は南西方向に倒れかけており、これらの石は垂直に立てられていた可能性が高い。また、南東端の石も北方向からの圧力によって外側に倒れたとすれば、この石は南東部の側石となり、この北側に接する石は南東端の石の安定を図るために、下に据えていたものと思われる。さらに北西側円礫の内寄りの角礫は、北隅の石が倒れかけたことによって、北西部の側石が内側に入り込んだものと推定できる。この状況から復元すると、四壁が角礫で囲われた中は、内法で長さ約60cm、幅約40cm、高さ約40cmの空間を作っていたことになる。

ところで円礫のうち、北西側の石は据えられており、北西部の側石の支え石であろう。石組中央部の円礫は4個あり、積み重ねられた須恵器片を3個で囲み、上述したように上部に1個乗せていた。重ねられた須恵器片がほとんど崩れていないことを考え合わせると、これらの円礫と須恵器片は当初から据え置かれたものであろう。

なお、側石が外側に倒れかけたとするならば、石組を築くような掘り方は当初からなく、石を立てるための部分だけ掘り込まれていたものと考えられる。



第18図 石井ヶ原遺跡S X 1実測図(1:30)

V 出土遺物

石井ヶ原遺跡群では、前述のように2基の古墳と第2号古墳の墳丘下で石蓋土壙墓が検出された。出土した遺物は土器（須恵器・土師器）と鉄器であるが、この他に第1号古墳墳丘下の堆積土中から須恵器と砥石が出土している。ところがこの墳丘下から出土した須恵器の大半は第1号古墳墳丘の盛土中から出土したものと接合することが明らかとなり、これらの須恵器は第1号古墳に供献されたものではないことが考えられた。このことから第1号古墳の墳丘下出土の須恵器も第1号古墳出土のものと合わせて記述する。なお、ここではその概略を述べ、個々については観察表に一括した。

1 石井ヶ原第1号古墳（第19～21図，図版19～21・24）

第1号古墳とその墳丘下では須恵器と土師器および鉄器・砥石が出土している。

A. 須恵器（第19・20図1～22）

1. 杯蓋（1～8・17）

形態によって大きく2形式に分類される。

I類（1～8） 口径13～14cm，器高4cm前後のものである。天井部は平坦気味に作るため口径に比べて器高が低いことを特徴とする。天井部と口縁部を界する突線は比較的鋭く突出し，口縁は若干ではあるが「ハ」字状に開く。また口縁端部は窪面をもって内傾するものとはわずかに窪むものがある。突線を中心にみると大半のものが天井部と口縁部の高さの比がほぼ同じなのに対し，8は天井部が口縁部のその2/3程度である。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で天井部外面のケズリの範囲は広く，仕上げナデは不定方向と一定方向のものと施していないものがある。

II類（17） 口径11.7cm，器高は推定で4.5cm前後である。天井部は丸く，口径が小さいため器高が高く見える。また口縁端部は丸くおさめている。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で天井部外面のケズリの範囲は器高のほぼ1/3を占める。

2. 杯身（9～16）

形態によって大きく2形式に分類される。

I類（9～14） 口径11～12cm，受部径12～14cm，器高4.5～5cm前後のものであり，14がもっとも大きい。底部は平坦気味でそのまま受部に向かって垂直に立上がり，口縁部は若干内傾するが側面観は長形状をなすことを特徴とする。底部と口縁部を界する受部は鋭いが，横にのびるものと斜め上方にのびるものがある。この受部を中心にと天井部と口縁部の高さの比はほぼ同じといえよう。また口縁端部は段をもっている。成形はマキ

アゲ・ミズビキ成形で底部外面のケズリの範囲は広く、仕上げナデは不定方向と一定方向のものと施していないものがある。

II類 (15・16) 口径12cm, 受部径13cm, 器高5cm前後のものである。底部は丸みもちそのまま受部に向かって立上がり, 口縁部は若干内傾することを特徴とする。口縁部と底部を界する受部は斜め上方にのび, 口縁端部は明瞭な段をもつ。この受部を中心にみると口縁部と底部の高さは2/3程度と底部が深い。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で底部外面のケズリの範囲は広く, 仕上げナデは不定方向のものと施していないものがある。

3. 高杯 (18・19)

形態によって2形式に分類される。

I類 (19) 無蓋高杯で口径17.6cm, 脚端径9.6cm, 器高12.9cmのものである。杯部は底部が丸く, 突線から口縁部にかけて外上方にのび, 脚部は側面観が台形状をなす。また口縁端部は窪面をもって内傾し, 脚端部は丸くおさめることを特徴とするが突線は尖る。杯部には1か所に把手の退化した耳状の装飾を付け, 粗い波状文をめぐらしている。透は縦長の台形で3か所みられるが, 角には穿透の際の工具痕跡が残っている。成形はマキアゲ・ミズビキ成形によるが杯外面にはケズリを残し, 脚は貼付け手法である。

II類 (18) 脚部の破片であるが小形で低脚の無蓋高杯と考えられる。透はなく, 脚端部が若干肥厚して面をもつ。

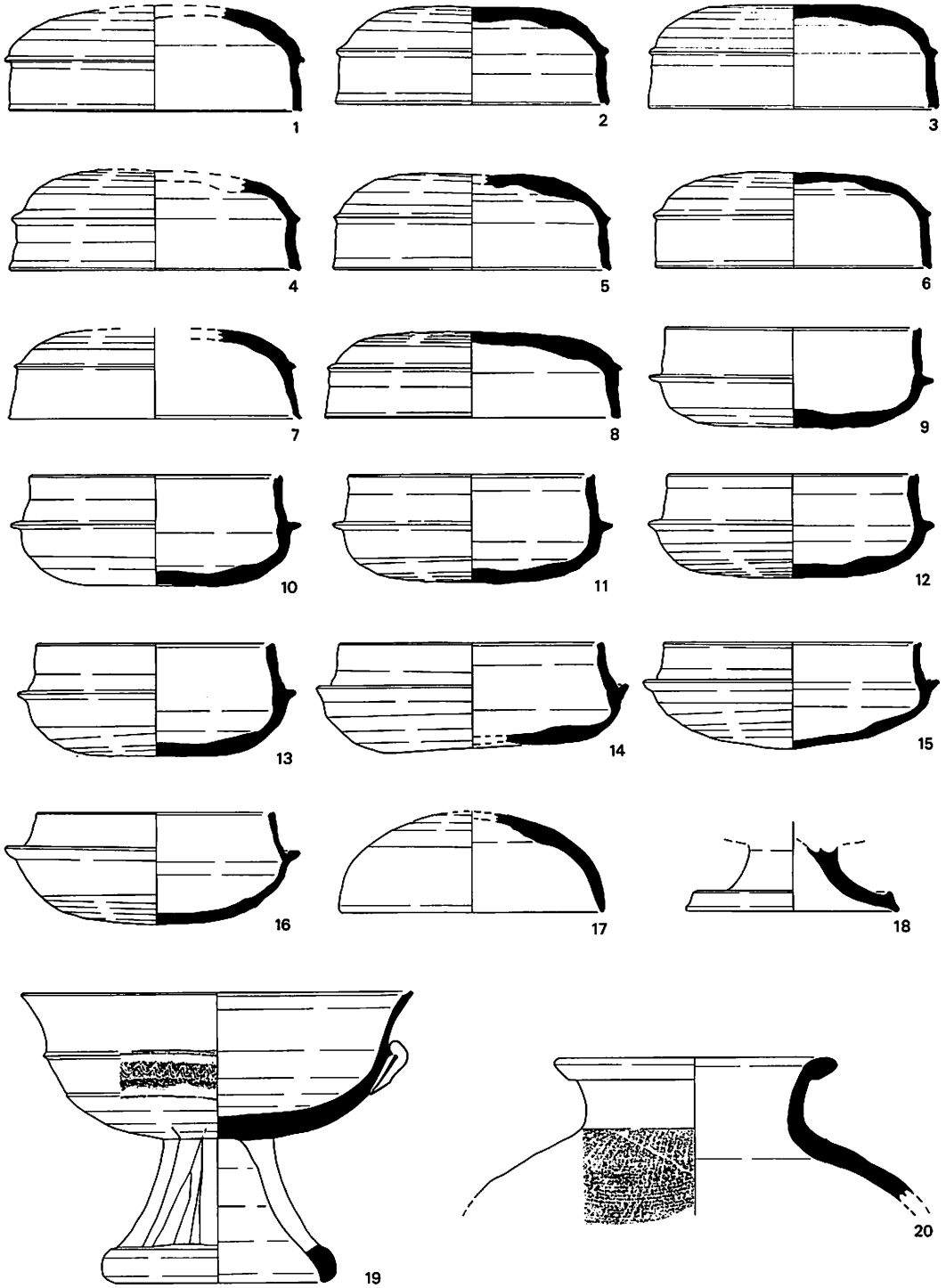
4. 甕 (20~22)

小形・中形・大形の3形式が存在する。

I類 (20) 口径12.6cmと小形のものである。頸部は短い口縁端部は肥厚し, 肩部が張る。成形はマキアゲ・ミズビキ成形によるが, 頸部と胴部の外面は斜めの平行タタキののちに頸部はミズビキ, 胴部はカキ目をそれぞれ施している。平行タタキは途中で切れていないことからすると頸部は折曲げ手法によって成形した可能性が考えられよう。なお内面のタタキ目は明らかでない。

II類 (21) 口径22cmと中形のものである。形態的にはI類を大きくしたもので, 頸部は短い口縁端部は肥厚し, 肩部が強く張る。成形はマキアゲ・ミズビキ成形によるが, 頸部と胴部の外面は斜めの平行タタキののちに頸部はミズビキ, 胴部はカキ目をそれぞれ施している。平行タタキは途中で切れていないことからすると頸部は折曲げ手法によって成形した可能性が考えられよう。また胴部内面は同心円タタキを施している。

III類 (22) 頸部の破片であるが, 器壁も厚く大形品と推定される。突線を2条もち, それぞれの上下には細い凹線をめぐらしている。またその突線のあいだには粗い波状文を

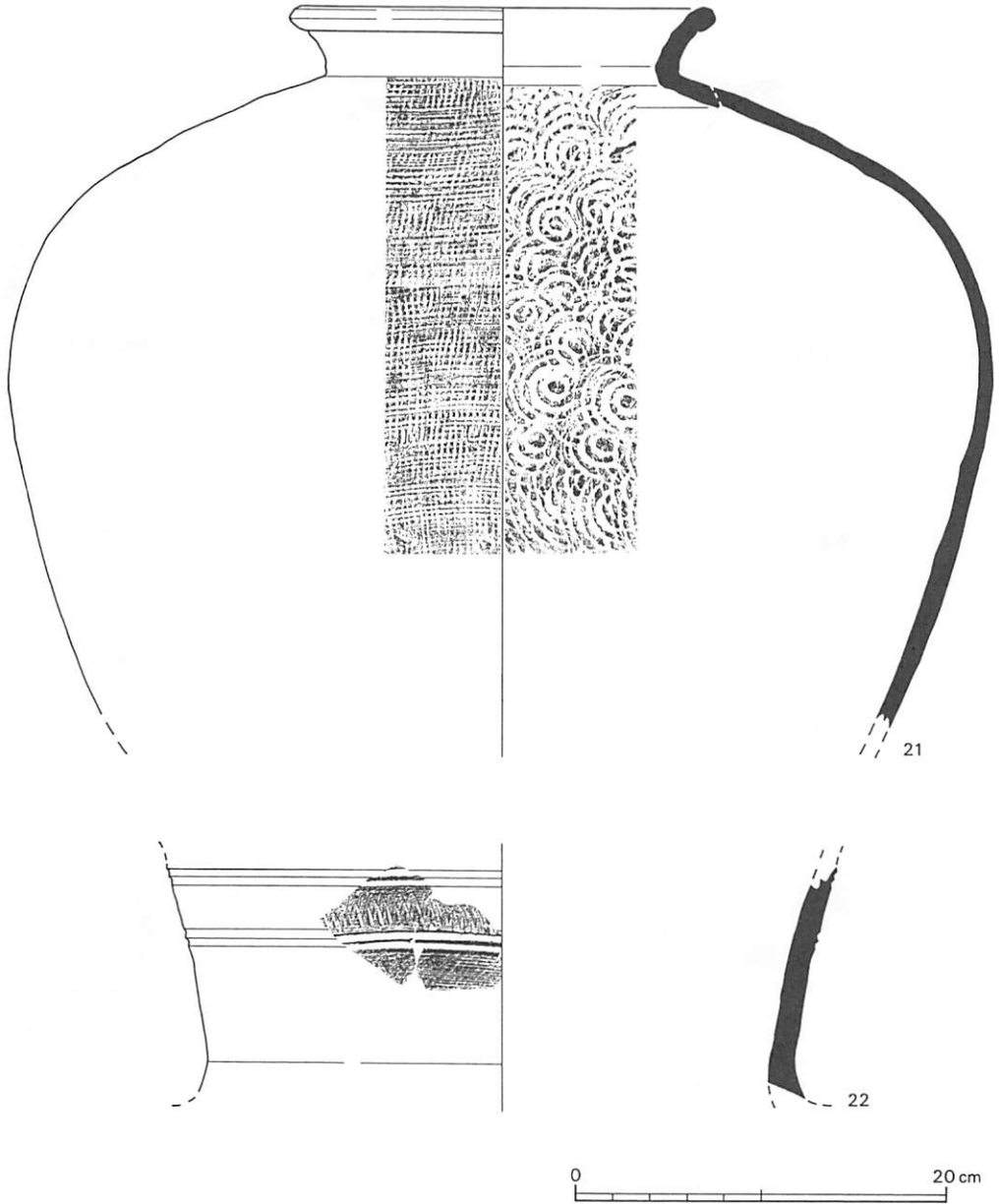


第19図 石井ヶ原第1号古墳出土遺物実測図I (1:3)

施している。成形はマキアゲ・ミズビキ成形によるが、外面には前二者と同じく斜めの平行タタキののちにカキ目により調整している。

B. 土師器

図示していないが、小形丸底壺の口縁部片が出土している。



第20図 石井ヶ原第1号古墳出土遺物実測図Ⅱ（1：4）

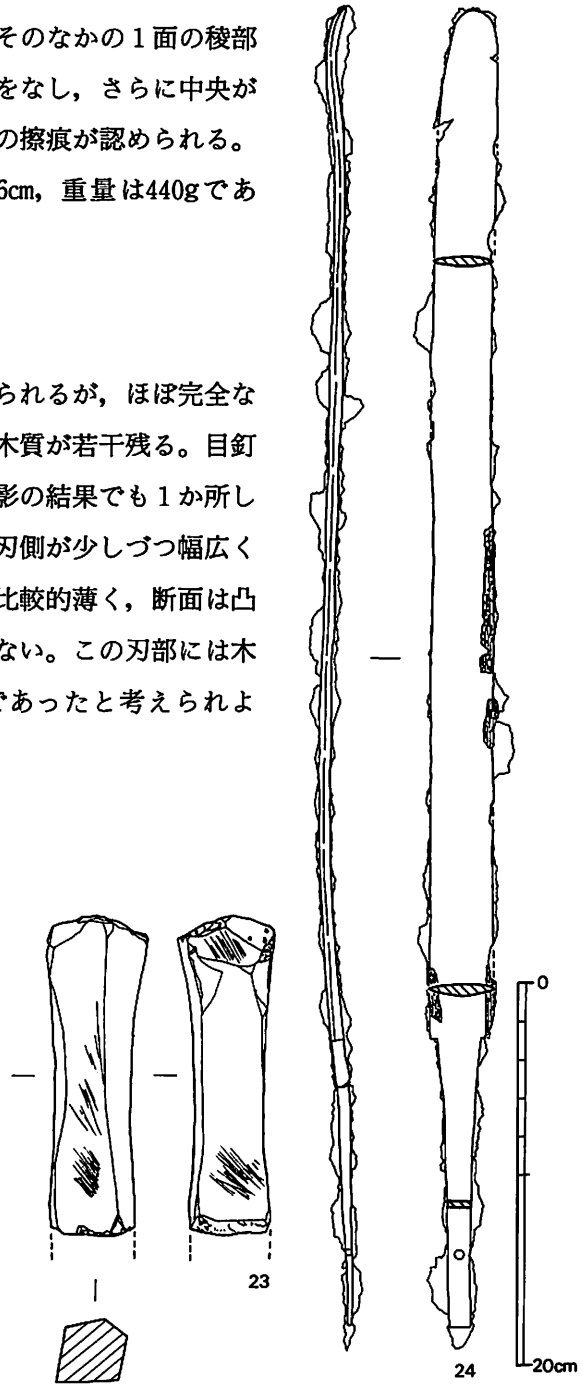
C. 砥石 (第21図23)

直方体をなした短冊形の砥石である。小口部分は片方が欠損しているが、反対側は自然面を一部に残している。本来は4面を利用していたと推定されるが、そのなかの1面の稜部分も新たに利用したため断面は五角形をなし、さらに中央が細く逆に両側太い。表面は平滑で多くの擦痕が認められる。長さ16.2cm、最大幅5cm、最小幅3.6cm、重量は440gである。

D. 鉄剣 (第21図24)

一部を欠損し、土圧による湾曲がみられるが、ほぼ完全な形をなした鉄剣である。茎部には柄の木質が若干残る。目釘穴は本来2か所にみられるが、X線撮影の結果でも1か所しか明らかにできなかった。この茎部は刃側が少しずつ幅広くなり、関は直角をなしている。刃部は比較的薄く、断面は凸レンズ状をなしているため鑄は明瞭でない。この刃部には木質が残存していることから剣は木装であったと考えられよう。なお切先はあまり尖らない。

全長67.8cm、茎部長14.9cm、
茎部幅1.2~1.3cm、茎部厚0.4
cm、刃部長52.9cm、刃部幅
3.2~3.6cm、刃部厚0.6cm、重
量は429.02gである。



第21図 石井ヶ原第1号古墳出土遺物実測図Ⅲ (1:4)

2 石井ヶ原第2号古墳（第22～26図，図版20・22～24）

第2号古墳では周溝とその周辺から多量の須恵器と土師器が出土している。なお，そのうちの1点（高杯-39）は第1号古墳墳丘盛土内出土のものが接合した。

A. 須恵器（第22～26図25～65）

1. 杯蓋（25・26）

25は口径11.8cm，器高4cm前後，26は口径13.4cm，器高3.5cmである。前者は天井部が丸く，後者は若干の凹凸があるものの平坦気味に作るが，両者とも口縁部は「ハ」字状に開く。また口縁端部は丸くおさめている。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で，天井部外面のケズリの範囲は比較的狭い。仕上げナデは一定方向である。

2. 杯身（27・28）

口径11～12cm，受部径14cm，器高4cm前後のものである。底部は丸みをもつが前者は受部下が直線的にのびているために尖底状に見える。受部は斜め上にのび，口縁部は内傾して端部は丸くおさめている。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で，底部外面のケズリの範囲は狭い。また口縁部は折込み手法による。

3. 高杯（29～45）

蓋の有無で大別2形式に分けられるが，さらに形態によって細別4形式に分類される。

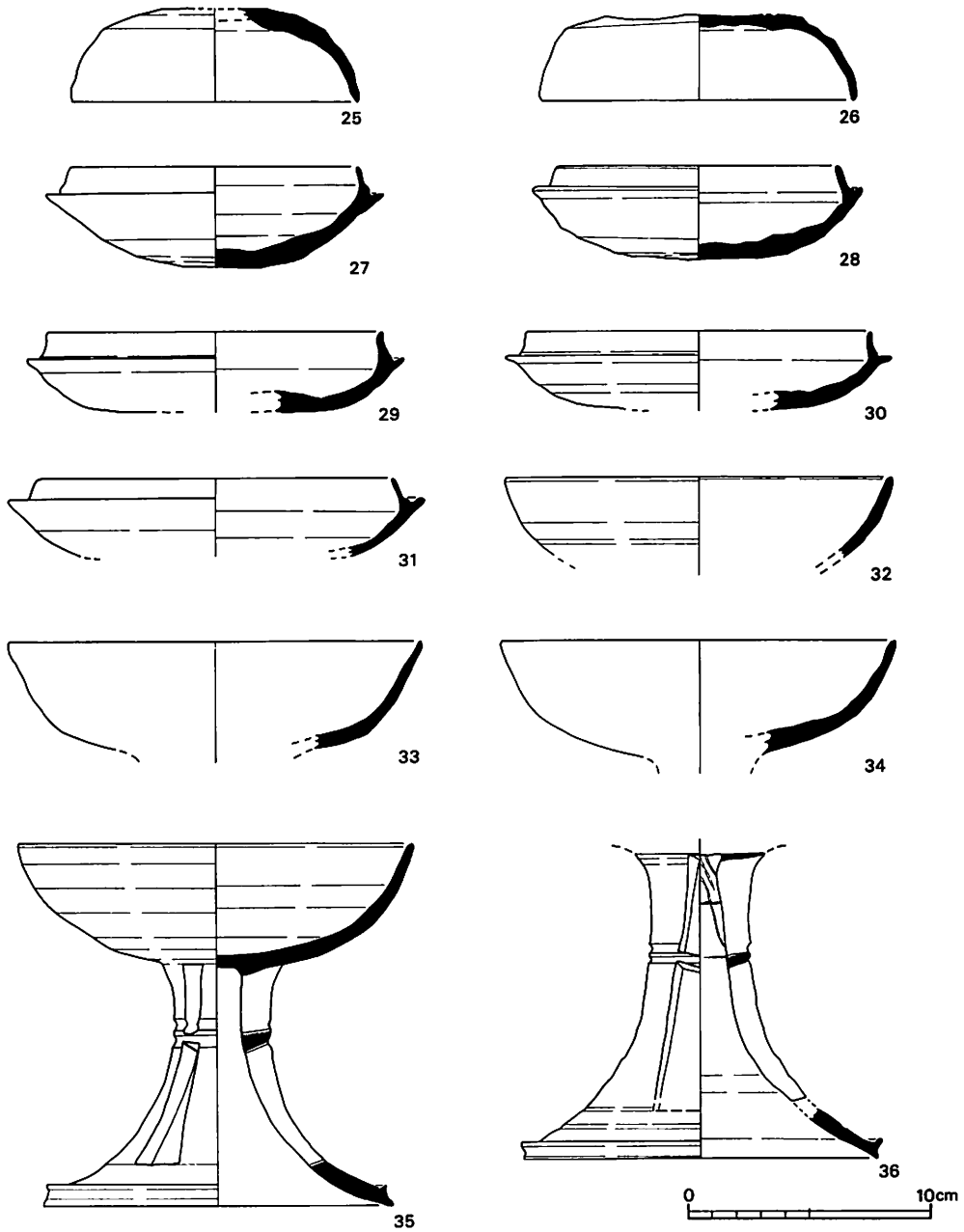
I類（29～31） 有蓋高杯の杯部である。口径14cm，受部径16cm前後と大振りであるが浅く，底部は平坦で広い。受部は斜め上にのび，口縁部は内傾して端部は丸くおさめている。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で，底部外面のケズリの範囲は広い。また口縁部は折込み手法による。脚部は接合する破片がなく明らかにできない。

II類（32～38） 無蓋高杯であるが，杯部が椀状をなすことを特徴とし，口径15～17cm脚端径14cm，器高15cm前後と中形の大きさである。杯部は口縁部が内湾気味に上方にのびるものと直線的にのびるものがある。脚部は端部が大きくラップ状に開き，肥厚する。透は長方形のものと縦長の台形のものを上下2段に，相対する位置に2か所穿孔しており，それぞれの角には穿孔の際の工具痕跡が残るものもある。また上下の透のあいだ付近と下段の透の下方付近には沈線をめぐらしている。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で，底部外面のケズリの範囲は広い。脚部の内面にはシボリ痕跡を残しているものがあり，接合は貼付け手法による。

III類（39～45） 無蓋高杯であるが，脚部の形態によりさらに2形式に分類される。

a類（39・40） 短脚の無蓋高杯である。口径11cm，脚端径9.8cm，器高9.8cmで杯底部は平坦気味で突線下で強く折曲がり，外傾する口縁に移行するものである。脚部は端部が

大きく開き、肥厚する。透は縦長の長方形のものを上下2段に、相対する位置に2か所穿孔しており、それぞれの角には穿孔の際の工具痕跡が残るものもある。また上下の透のあいだ付近には凹線をめぐらしている。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面のケズ



第22図 石井ヶ原第2号古墳出土遺物実測図I (1:3)

りの範囲は狭い。脚部の接合は貼付けによる。

b類 (41~45) 長脚の無蓋高杯である。口径11~13cm, 脚端径12cm, 器高14cm前後で杯部はほぼa類と同様な形態をなしているが, 底部と口縁部の境付近に下方の突線をめぐらしている。脚部はI類に類似するが, 端部はそれに比べて大きく開かない。透明は長方形のものと縦長の台形のを上下2段に, 相対する位置に2か所穿孔しており, それぞれの角には穿孔の際の工具痕跡が残るものもある。また上下の透のあいだ付近と下段の透の下方付近には沈線をめぐらしている。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で, 底部外面のケズリの範囲は狭い。脚部の内面にはシボリ痕跡を残しているものがあり, 接合は貼付け手法による。

4. 壺蓋 (46~49・54・55)

形態や大きさによって大別2形式, 細別6形式に分類される。

I類 (46・47) 口縁部内面にかえりをもつものである。天井部は丸く, ボタン状の紐をつけることを特徴としている。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で, 天井部外面のケズリの範囲は広く, 内面には仕上げナデを施している。またかえりは折込み手法による。46は口径8.8cm, 器高4.2cm, 47は口径15cm, 器高6.2cmという大きさの違いから前者をa類, 後者をb類とする。

II類 (48) 口径8.8cm, 器高3.2cmでその形態から坩蓋と考えられるものである。天井部は平坦気味に作るが大きく折曲がり, 口縁部は垂下するため, 側面観は長形状をなすことを特徴とする。また口縁端部は若干窪んで内傾する。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で, 天井部外面のケズリの範囲は狭い。

III類 (49・54) 形態的にはII類を大きくしたものであるが, 天井部にボタン状の紐をつけることを特徴としている。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で, 天井部外面のケズリの範囲は狭く, 内面には不定方向の仕上げナデを施している。49は口径14cm, 54は口径24.2cmという大きさの違いから前者をa類, 後者をb類とする。

IV類 (55) 口径25cmで天井部にボタン状の紐がつくと推定されるものである。天井部を丸く作っているため, 他のものに比べて口径に対して器高が高くみえる。また口縁部は「ハ」字状に開き, 端部は外側に折曲げている。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で, 天井部外面のケズリの範囲は広い。

5. 壺 (50~53・56・57)

形態によって3形式に分類される。

I類 (50) 口縁部のみであるが小形の丸底壺の破片で, 口径11cmを測る。成形はマキ

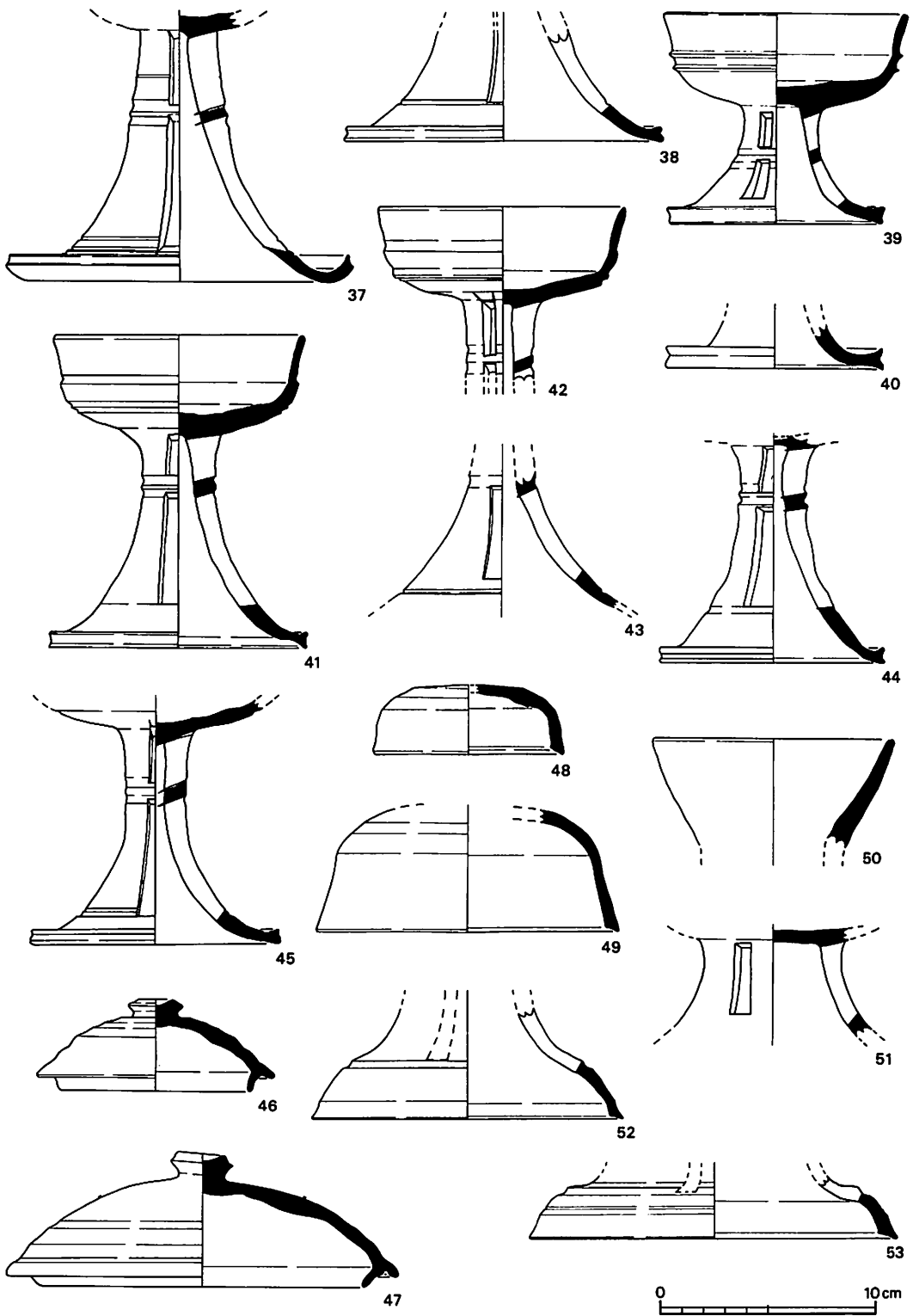


图23图 石井ヶ原第2号古墳出土遺物実測図Ⅱ(1:3)

アゲ・ミズビキ成形による。

II類 (51～53・57) 脚付長頸壺である。すべての破片が接合するわけではなく、大きさやつくりから数個体が考えられる。口頸部はないが胴部 (57) と底部 (51) および脚部 (52・53) がある。胴部は肩が張るため最大径は上半にみられ、脚部は大きく開き、端部付近で折曲がって内湾気味にのびる。文様は肩部に櫛歯状工具による押引文を施し、脚部には縦長の台形をなす透を相対する位置に2か所穿孔している。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で、脚部の接合は貼付けによる。また胴部下半にはケズリを施しており、肩部にはカキ目がみられる。なお、壺蓋 I-a 類はこの脚付長頸壺の蓋である。

III類 (56) 短頸の広口壺である。口径25.5cm、胴部最大径34cm、器高は推定で24～25cmを測る。口頸部は垂直に立上がり、端部は内傾する。また胴部は扁平気味で相対する位置に2か所把手状の装飾をつけた、いわゆる二耳壺と称されるものである。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で、胴部外面には平行タタキの上をカキ目、内面には同心円のタタキ目をそれぞれ施している。

6. 椀 (58)

丸い底部をもち、そこから強く内側に折曲がり内傾気味に上方に立上がる形態、すなわちチューリップの花状をなした椀である。破片であるため詳細は明らかでないが、柄杓状の把手がつく可能性があり、高田郡甲田町古上第1号古墳出土例からすると臙状に体部の中央に1か所円孔が存在することも考えられよう。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で、底部はケズリ、体部にはカキ目を施している。

7. 平瓶 (60)

饅頭状の体部をもち、上方の中心よりも若干外側に穴を穿してこの部分に漏斗状の口縁部をつけた、体部最大径27.6cmと大形のものである。成形はマキアゲ・ミズビキ成形であるが内面には指頭圧痕を残す。体部の封鎖痕跡は背部にみられ、円盤充填によるがこの円盤は直径12cm前後と大きい。また体部上半の破片であるため詳細は明らかでないが、ほぼ前面にカキ目を施している。

8. 提瓶 (61～63)

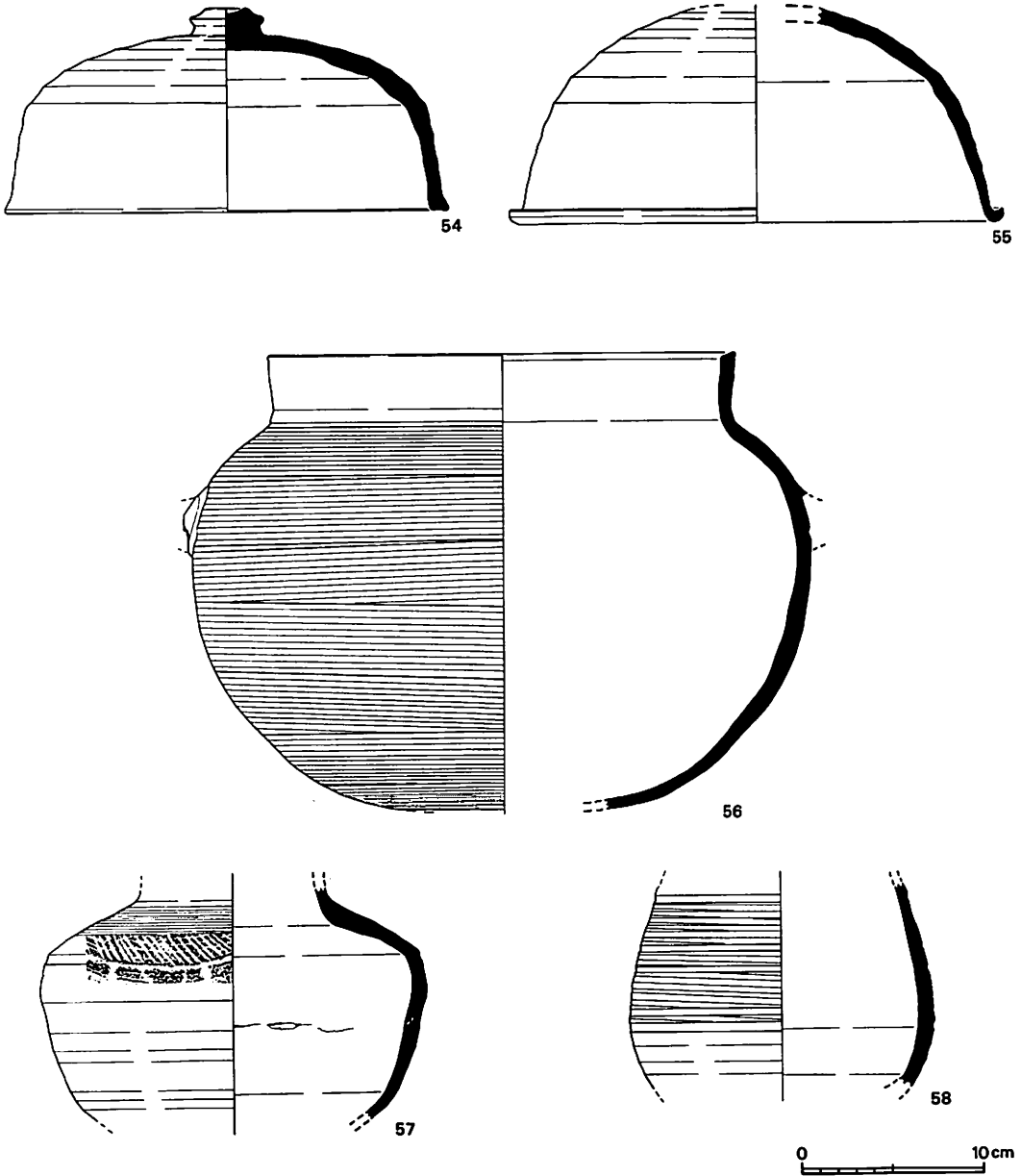
大きさによって2形式に分類される。

平瓶と同じつくりをした体部の側面に穴を穿ち、この部分に漏斗状の口縁部をつけたものである。立てて使用するため体部の封鎖痕跡は横にみられるが、円盤充填による。成形はマキアゲ・ミズビキ成形であり、体部外面にはカキ目を施している。61は体部の推定直径15cmと小形で、62・63は20～21cmと大きいことから前者をa類、後者をb類とする。な

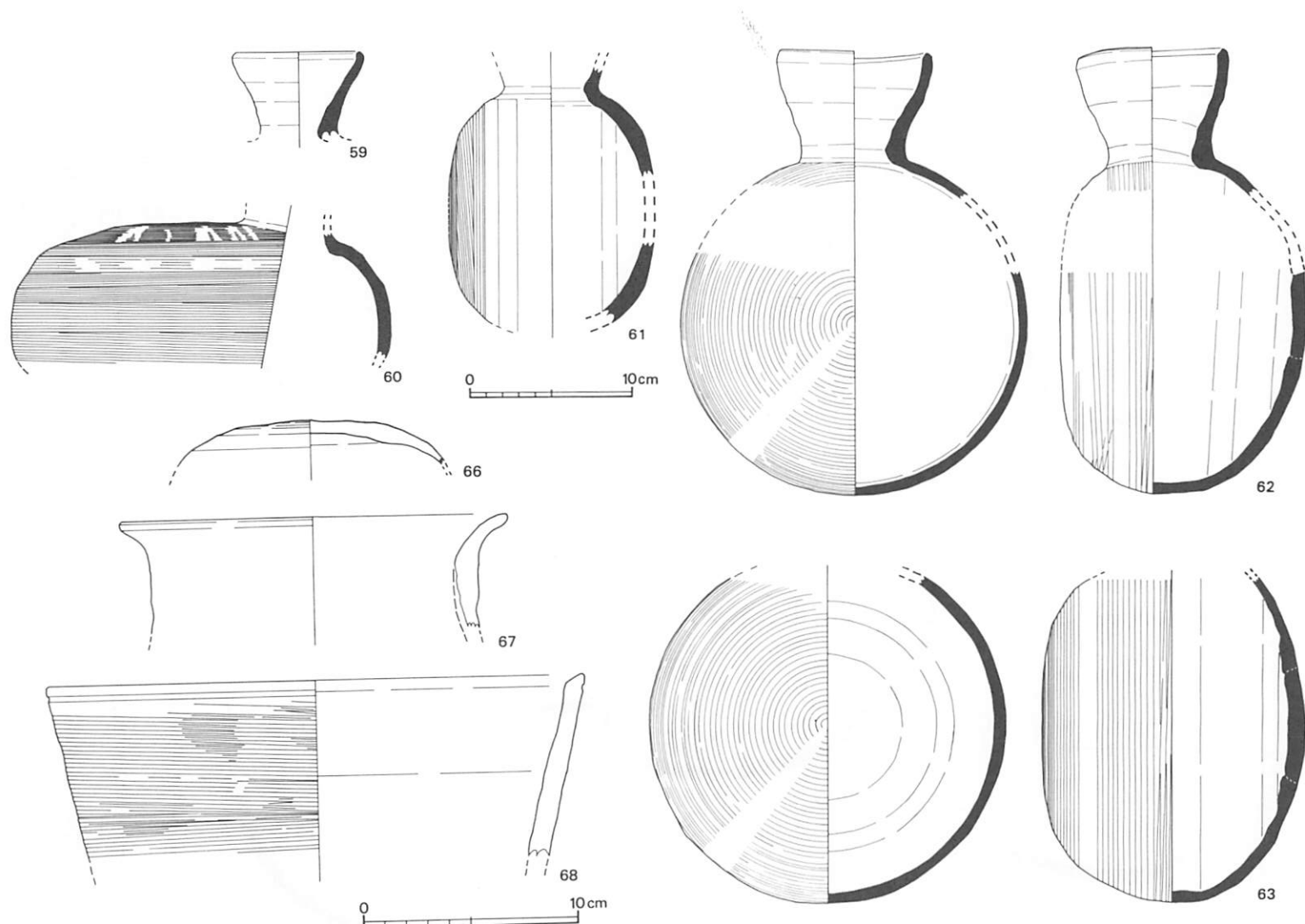
お、59は口縁部の破片であるが平瓶か提瓶か明らかでない。

9. 甕 (64・65)

いずれも胴部の破片である。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で両者とも外面は平行タタキの上をカキ目、内面は同心円タタキ目である。このうち64の内面には当て具に残った工具痕が明瞭に認められる。



第24図 石井ヶ原第2号古墳出土遺物実測図Ⅲ (1:4)



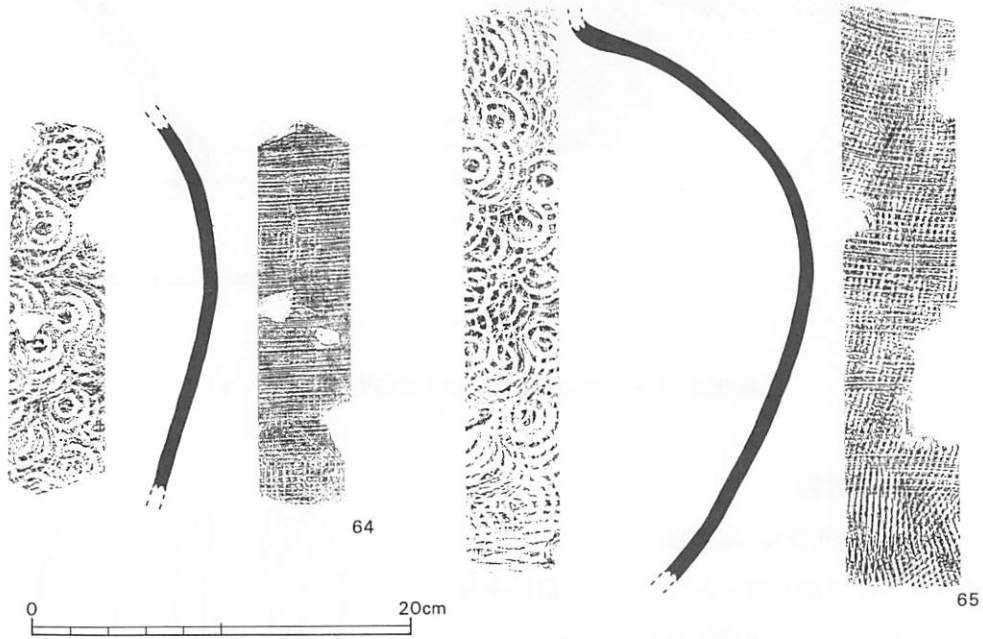
第25図 石井ヶ原第2号古墳出土遺物実測図Ⅳ (1:3, 1:4) (59~63:1:4, 66~68:1:3)

B. 土師器 (第25図66~68)

1. 杯 (66) 杯蓋の天井部か杯身の底部かは明らかでない。形態および形成・調整ともに須恵器と同じであるが、生焼けのものではなく酸化炎焼成と推定されるものである。このことは器壁外面に黒斑が認められることからいえよう。

2. 甕 (67) 頸部が若干肥厚して口頸部が湾曲気味に外反するもので、胴部はあまり張らないとともに底部は丸底をなすと考えられる。調整はヨコナデである。

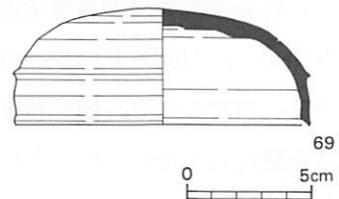
3. 甗 (68) 底部から直線的に外傾して口縁部に移行するもので、バケツ状をなす甗である。胴部中央付近には相対する2か所に牛角状の把手をもつ。杯同様に形態および成形が須恵器と同じであるが、生焼けのものではなく酸化炎焼成と推定される。なお、外面の調整はカキ目である。



第26図 石井ヶ原第2号古墳出土遺物実測図V (1:4)

3 石井ヶ原遺跡SK7 (第27図, 図版24)

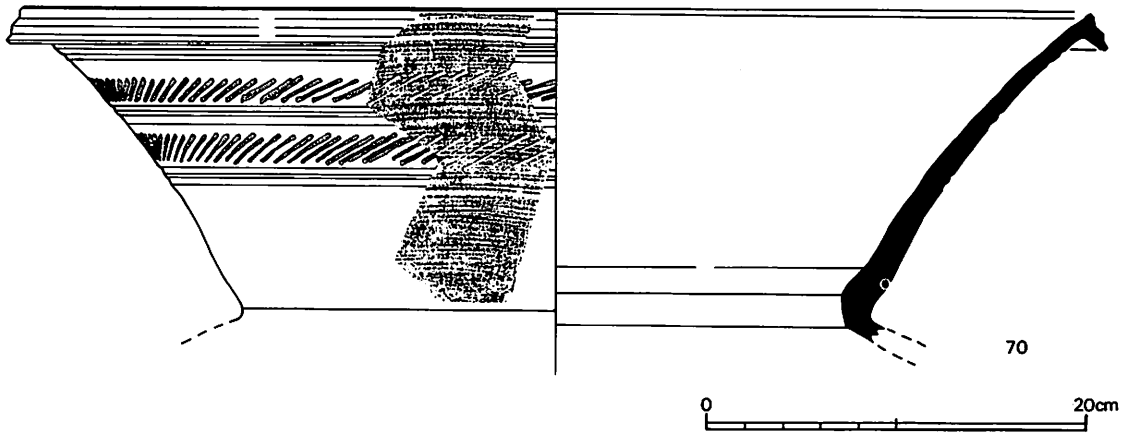
須恵器, 杯蓋 (69) 天井部は丸く、口径に対して器高が高いことを特徴とする。天井部と口縁部を界する突線は低いが、鋭く突出し、口縁部は垂下する。また口縁端部は段をもって内傾する。成形はマキアゲ・ミズビキ成形で天井部外面のケズリの範囲は広い。



第27図 石井ヶ原遺跡SK7
出土遺物実測図 (1:3)

4 石井ヶ原遺跡S X 1 (第28図)

須恵器，甕 (70) 口径56cmを測る大形品である。強く張ると推定される肩部から反転し、大きく外反する口頸部をもつものである。口縁部は外下方に折れ曲がった、いわゆる鋤先状口縁をなしている。成形はマキアゲ・ミズビキ成形ののちに口頸部外面はカキ目を施し、その工具を利用して刺突文を2段めぐらしている。また刺突文の上下には沈線を、口縁部には浅い凹線をそれぞれめぐらしている。



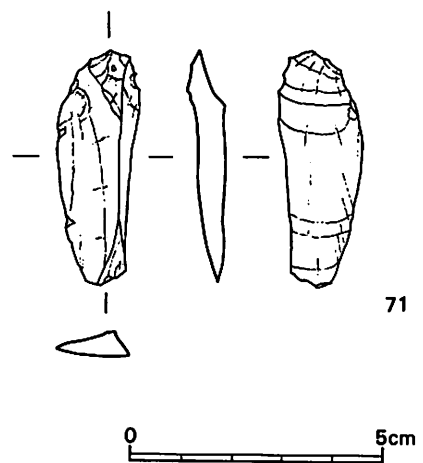
第28図 石井ヶ原遺跡S X 1 出土遺物実測図 (1 : 4)

5 その他の遺物

剥片 (第29図71, 図版24)

第2号古墳周溝の覆土から出土した縦長剥片である。打面と主要剥離面の打点がないことから、剥ぎ取られた当初はさらに長かったことが考えられよう。背面の剥離状態は左側のものが左方向から、右側のものは上方向からおこなっている。少なくとも打面を移転して2方向から剥離作業をおこなっているといえよう。

長さ4.1cm, 幅1.5cm, 厚さ0.5cmで、重さ5.23gである。



第29図 石井ヶ原第2号古墳出土石器実測図 (2 : 3)

第2表 出土遺物観察表

第1号古墳出土土器観察表

No	器形	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	焼成・色調・備考
1	杯蓋 I類	口径 13cm 突線径13.3cm	突線は鋭くのび、口縁部は垂下して端部は窪む。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリを施す。	胎土：1mm前後の砂粒を含む。 色調：暗青灰色。 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内および墳丘下出土。
2	杯蓋 I類	口径 12cm 突線径12.1cm 器高 4.4cm	天井部は平坦だが突線は太く丸い。口縁部は「ハ」字状に開き、端部は段をもって内傾する。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリ、内面には一定方向の仕上げナデを施す。 回転台は左回り。	胎土：1mm前後の砂粒を含む。 色調：暗青灰色。外面に淡緑灰色の自然釉。 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内および墳丘下出土。
3	杯蓋 I類	口径 12.8cm 突線径12.9cm 器高 4.7cm	天井部は平坦で中央が窪む。突線は鋭くのび、口縁部は「ハ」字状に開き、端部は若干内傾する。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリ、内面には不定方向の仕上げナデを施す。	胎土：砂粒を若干含む。 色調：暗青灰色～暗灰色 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内および墳丘下出土。
4	杯蓋 I類	口径 12.8cm 突線径12.8cm 器高 4.4cm	突線は鋭くのび、口縁部は外湾気味に「ハ」字状に開き、端部は内傾する。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリ、内面には一定方向の仕上げナデを施す。	胎土：1mm前後の砂粒を含む。 色調：暗青灰色。外面に淡青灰色の自然釉。 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内出土。
5	杯蓋 I類	口径 12.2cm 突線径12.2cm 器高 4.3cm	天井部は平坦で突線は細く鋭い。口縁部は「ハ」字状に開き、端部は窪面をもって内傾する。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリを施す。	胎土：1mm前後の砂粒を含む。 色調：暗青灰色。外面に淡青灰色の自然釉。 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内および墳丘下出土。
6	杯蓋 I類	口径 12.2cm 突線径12.4cm 器高 4.3cm	天井部は平坦気味で突線は鋭くのびる。口縁部は若干開き、端部は内傾する。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリを施す。 回転台は左回り。	胎土：1mm前後の砂粒を含む。 色調：暗青灰色。 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内および墳丘下出土。
7	杯蓋 I類	口径 12.9cm 突線径12.6cm	突線は鋭くのび、口縁部は外湾気味に「ハ」字状に開き、端部は窪み大きく内傾する。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリを施す。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：暗青灰色～青灰色 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内出土。
8	杯蓋 I類	口径 12.9cm 突線径12.9cm 器高 3.9cm	天井部は平坦で突線は鋭くのびる。口縁部は「ハ」字状に開き、端部は窪面をもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリ、内面には一定方向の仕上げナデ	胎土：3mm前後の砂粒を含む。 色調：暗灰色。 焼成：良好，堅緻。

				を施すがケズリの範囲は狭い。 回転台は右回り。	第1号古墳墳丘内および墳丘下出土。
9	杯身 I類	口径 11.2cm 受部径12.7cm 器高 4.4cm	底部は平坦で中央が窪み、受部は鋭くのびる。口縁部は内傾気味に直立し、端部は段をもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面は回転ケズリを施す。	胎土：1～3mm程度の砂粒を含む。 色調：暗青灰色。 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内出土。
10	杯身 I類	口径 11cm 受部径12.9cm 器高 5cm	底部は平坦で中央が窪み、受部は鋭くのびる。口縁部は内傾気味に直立し、端部は段をもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面は回転ケズリ、内面は不定方向の仕上げナデを施す。 回転台は左回り。	胎土：1mm前後の砂粒を含む。 色調：暗青灰色～青灰色 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内出土。
11	杯身 I類	口径 10.9cm 受部径12.5cm 器高 4.9cm	底部は平坦で、受部は鋭くのびる。口縁部は内傾気味に直立し、端部は段をもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面は回転ケズリ、内面は不定方向の仕上げナデを施す。 回転台は左回り。	胎土：2mm前後の砂粒を含む。 色調：暗青灰色～青灰色 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内および墳丘下出土。
12	杯身 I類	口径 11.2cm 受部径12.8cm 器高 4.6cm	底部は平坦で、受部は鋭くのびる。口縁部は内傾気味に直立し、端部は段をもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面は回転ケズリ、内面は不定方向の仕上げナデを施す。 回転台は左回り。	胎土：2mm前後の砂粒を含む。 色調：暗青灰色～青灰色 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内出土。
13	杯身 I類	口径 10.5cm 受部径12.4cm 器高 5cm	底部は平坦で、受部は太く丸い。口縁部は内傾気味に直立し、端部は段をもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面は回転ケズリを施す。 回転台は左回り。	胎土：1mm前後の砂粒を含む。 色調：暗青灰色。 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内および墳丘下出土。
14	杯身 I類	口径 11.5cm 受部径13.9cm 器高 4.9cm	底部は平坦で中央が窪み、受部は太く斜め上方にのびる。口縁部は内傾気味に直立し、端部は内傾する。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面は回転ケズリ、内面は一定方向のケズリを施す。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：青灰色～淡茶灰色 焼成：良好。 第1号古墳墳丘内出土。
15	杯身 II類	口径 11.4cm 受部径13.3cm 器高 4.8cm	底部は丸く、受部は斜め上方にのびる。口縁部は内傾気味に直立し、端部は段をもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面は回転ケズリを施す。 回転台は左回り。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：青灰色～暗茶灰色 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内出土。
16	杯身 II類	口径 10.7cm 受部径13.3cm 器高 5cm	底部は丸く、受部は斜め上方にのびる。口縁部は内傾気味に直立し端部は若干肥厚する。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面は回転ケズリ、内面は不定方向のケズリを施す。 回転台は左回り。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：青灰色～淡青灰色 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内および墳丘下出土。

17	杯蓋 II類	口径 11.7cm	天井部は丸く、口縁部は「ハ」字状に開く また端部は丸くおさめている。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリを施す。	胎土：1～2mm程度の砂粒を含む。 色調：淡灰褐色～青灰色 灰色の自然釉付着。 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内および墳丘下出土。
18	高杯 I類	口径 17.3cm 脚端径 9.2cm 器高 13cm	杯は底部が丸く、突線は尖り、口縁部は外湾気味に開く。脚部は縦長の台形状をなし、端部は丸くおさめる。また外耳は1か所につき、透は縦長の台形のを3か所穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形で、杯底部外面は回転ケズリを施す。また脚部の接合は貼付け手法による。外耳は粘土紐を貼付けたものであり、その下には粗い波状文をめぐらしている。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。 色調：暗灰褐色。 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内出土。
19	高杯 II類	脚端径 9.3cm	脚端が大きく開き、肥厚する。	マキアゲ・ミズビキ成形による。	胎土：細かい砂粒の含む 色調：淡灰褐色。 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内および墳丘下出土。
20	甕 I類	口径 12.6cm 頸径 9.8cm	口頸部は外反し、端部が肥厚する。また肩部は張る。	マキアゲ・ミズビキ成形による。外面は平行タタキののち頸部はミズビキ、胴部はカキ目を施す。 頸部の成形は折曲げ手法による。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：淡灰褐色～青灰色 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内出土。
21	甕 II類	口径 20.7cm 頸径 18.2cm 胴径 51cm	口頸部は外反し、端部が肥厚する。また肩部は強く張る。	マキアゲ・ミズビキ成形による。外面は平行タタキののち頸部はミズビキ、胴部はカキ目を施し、内面には同心円タタキを残す。 頸部の成形は折曲げ手法による。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：淡灰褐色。 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内および墳丘下出土。
22	甕 III類	頸径 31.4cm	頸部が長く、器壁からすると大形品と考えられる。	マキアゲ・ミズビキ成形による。外面は平行タタキののちにカキ目を施し、粗い波状文をめぐらす。 頸部の成形は折曲げ手法による。	胎土：2mm程度の砂粒を含む。 色調：淡灰褐色。 焼成：良好，堅緻。 第1号古墳墳丘内出土。
	小形丸底壺	口径 7.8cm	球状の胴部に外反する口頸部がつく。	調整はヨコナデによる。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：暗茶褐色。 焼成：悪い。 第1号古墳墳丘内出土。

第2号古墳出土土器観察表

No	器形	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	焼成・色調・備考
25	杯蓋	口径 11.9cm 器高 3.8cm	天井部は丸く、口縁部は「ハ」字状に開く。また端部は丸くおさめている。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリを施す。	胎土：2mm程度の砂粒を含む。 色調：淡黄灰色。 焼成：良好。 第2号古墳周溝出土。
26	杯蓋	口径 12.8cm 器高 3.5cm	天井部は平坦であるが、口縁部は「ハ」字状に開く。また端部は丸くおさめている。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリ、内面には一定方向の仕上げナデを施す。 回転台は右回り。	胎土：1～2mm程度の砂粒を含む。 色調：淡青灰色～淡灰色 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
27	杯身	口径 11.8cm 受部径 14cm 器高 4.2cm	底部は丸く、受部は斜め上方にのびる。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリ、内面には一定方向の仕上げナデを施す。 回転台は右回り。	胎土：1～2mm程度の砂粒を含む。 色調：灰白色。 焼成：悪い。 第2号古墳周溝出土。
28	杯身	口径 11.4cm 受部径13.5cm 器高 3.8cm	底部は丸く、受部は斜め上方にのびる。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリ、内面には不定方向の仕上げナデを施す。	胎土：1～2mm程度の砂粒を含む。 色調：淡青灰色。暗灰緑色の自然釉付着。 焼成：良好。 第2号古墳周溝出土。
29	高杯 I類	口径 14.7cm 受部径17.3cm	杯は浅く底部が平坦で、受部は斜め上方にのびる。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面は回転ケズリを施す。	胎土：2mm程度の砂粒を含む。 色調：淡青灰色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
30	高杯 I類	口径 13.7cm 受部径15.6cm	杯は浅く底部が平坦で、受部は斜め上方にのびる。口縁部は内傾気味に上方にのび、端部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面は回転ケズリを施す。	胎土：2mm程度の砂粒を若干含む。 色調：暗茶灰色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
31	高杯 I類	口径 14cm 受部径15.8cm	杯は浅く底部が平坦で、受部は斜め上方にのびる。口縁部は内傾気味に上方にのび、端部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面は回転ケズリを施す。	胎土：2mm程度の砂粒を含む。 色調：淡黄灰色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
32	高杯 II類	口径 15.8cm	椀状になす杯部である。口縁部は内湾気味に外上方にのびる。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面は回転ケズリを施す。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：淡青灰褐色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。

33	高杯 II類	口径 16.9cm	椀状をなす杯部である。口縁部は直線気味に外上方にのびる。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面は回転ケズリを施す。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：淡黄灰色。 焼成：良好。 第2号古墳周溝出土。
34	高杯 II類	口径 16cm	椀状をなす杯部である。口縁部は直線気味に外上方にのびる。	マキアゲ・ミズビキ成形で、底外面は回転ケズリを施す。	胎土：2mm程度の砂粒を含む。 色調：淡灰色。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。
35	高杯 II類	口径 16.1cm 脚端径14.3cm 器高 14.9cm 脚高 9.9cm	杯部は椀状をなし，口縁部は内湾気味に外上方にのびる。脚部は大きく開き，端部は若干肥厚する。また透は長方形と縦長の台形ものを上下一対，2か所に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形で，杯底部外面は回転ケズリ，内面は不定方向の仕上げナデを施す。また脚部の接合は貼付け手法による。透のあいだには沈線をめぐらす。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：淡灰褐色。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。
36	高杯 II類	脚端径14.5cm 脚高 12.5cm	脚部は大きく開き，端部は肥厚する。また透は縦長の台形ものを上下一対，2か所に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形による。内面にはシボリ目を残す。透のあいだには沈線をめぐらす。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。 色調：淡灰色。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。
37	高杯 II類	脚端径16.1cm 脚高 11.5cm	脚部は大きく開く。透は長方形のものを縦長に上下一対，2か所に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形による。内面にはシボリ目を残す。透のあいだと下に沈線をめぐらす。	胎土：2mm程度の砂粒を含む。 色調：淡灰褐色。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。
38	高杯 II類	脚端径14.7cm	脚部は大きく開き，端部は肥厚する。透は長方形のものを縦長に上下一対，2か所に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形による。透の下に沈線をめぐらす。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。 色調：淡灰褐色。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。
39	高杯 III a類	口径 11.1cm 脚端径 9.8cm 器高 9.7cm 脚高 5.4cm	杯底部は平坦で口縁部は外傾気味に上方にのび，突線は2条めぐらる。脚部は短いが大きく開き，端部は若干肥厚する。また透は長方形と縦長の台形ものを上下一対，2か所に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形で，杯底部外面は回転ケズリ，内面は不定方向の仕上げナデを施す。また脚部の接合は貼付け手法による。透のあいだには沈線をめぐらす。	胎土：2mm程度の砂粒を含む。 色調：暗灰色。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝および出土。第1号古墳墳丘内出土。
40	高杯 III a類	脚端径10cm	脚部は短いが大きく開き，端部は若干肥厚する。	マキアゲ・ミズビキ成形による。	胎土：2mm程度の砂粒を含む。 色調：淡青灰色。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。

41	高杯 Ⅲ b 類	口径 11.2cm 脚端径11.9cm 器高 14.4cm 脚高 10.1cm	杯底部は平坦で口縁部は外傾気味に上方にのび、突線をめぐらし端部は丸くおさめる。脚部は長く、大きく開き、端部は若干肥厚する。また透は長方形のものを上下一対、2か所に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形で、杯底部外面は回転ケズリ、内面は不定方向の仕上げナデを施す。また脚部の接合は貼付け手法による。透のあいだには沈線をめぐらす。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。 色調：暗灰褐色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
42	高杯 Ⅲ b 類	口径11.3cm	杯底部は平坦で口縁部は外傾気味に上方にのび、突線をめぐらし端部は丸くおさめる。脚部は長く、透は長方形のものを上下一対、2か所に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形で、杯底部外面は回転ケズリ、内面は一定方向の仕上げナデを施す。また脚部の接合は貼付け手法による。透のあいだには沈線をめぐらす。	胎土：2mm程度の砂粒を含む。 色調：暗灰色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
43	高杯 Ⅲ b 類		脚部は長く、透は長方形のものを2か所に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形による。	胎土：2mm程度の砂粒を含む。 色調：淡青灰色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
44	高杯 Ⅲ b 類	脚端径10.2cm 脚高 10cm	脚部は長く、大きく開き、端部は若干肥厚する。また透は長方形と縦長の台形のものを上下一対、2か所に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形による。脚部の接合は貼付け手法で、透のあいだとその下には沈線をめぐらす。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。 色調：暗灰褐色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
45	高杯 Ⅲ b 類	脚端径11.3cm 脚高 9.7cm	脚部は長く、大きく開き、端部は若干肥厚する。また透は長方形と縦長の台形のものを上下一対、2か所に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形による。脚部の接合は貼付け手法で、透のあいだとその下には沈線をめぐらす。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：淡黄褐色～淡青灰色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
46	壺蓋 Ⅰ a 類	口径 10.8cm 紐径 2.5cm かえり径 8.7cm 器高 4.2cm	天井部は丸く、紐をもつ。口縁部は外下方にのび、かえりは内傾し、端部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリ、内面は一定方向の仕上げナデを施す。紐は貼付け手法かえりは折込み手法による。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。 色調：淡青灰色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
47	壺蓋 Ⅰ b 類	口径 18cm 紐径 2.4cm かえり径 14.9cm 器高 6.2cm	天井部は丸く、紐をもつ。口縁部は外下方にのび、かえりは内傾し、端部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリ、内面は不定方向の仕上げナデを施す。紐は貼付け手法かえりは折込み手法による。	胎土：2mm程度の砂粒を含む。 色調：暗青灰色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。

48	壺蓋 II類	口径 8.8cm 器高 3.2cm	天井部は平坦で、口縁部が垂下する。端部は内傾する。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリ、内面は一定方向の仕上げナデを施す。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。 色調：淡青灰色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
49	壺蓋 III a類	口径 14.3cm	天井部は平坦で、口縁部が垂下する。端部は内傾する。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリを施す。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：淡青灰色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
50	壺 I類	口径11.2cm	口縁部が内湾気味に外傾し、端部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形による。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：暗青灰色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
51	壺 II類		脚部が大きく開き、長方形の透を2か所に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形で、脚部の接合は貼付け手法による。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：暗灰色 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
52	壺 II類	脚端径14.4cm	脚部が大きく開き、端部付近で湾曲して内湾気味にのびる。透は長方形のものを2か所に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形による。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：淡灰褐色 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
53	壺 II類	脚端径16.9cm	脚部が大きく開き、端部付近で湾曲して内湾気味にのびる。透は長方形のものを2か所に穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形による。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：淡灰褐色 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
54	壺蓋 III b類	口径 24cm 鈕径 4cm 器高 11.1cm	天井部は丸く、鈕をもつ。また口縁部は外傾気味に垂下し、端部は若干肥厚する。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリ、内面は一定方向の仕上げナデを施す。鈕は貼付け手法による。	胎土：2mm程度の砂粒を含む。 色調：青灰色。黄緑色の自然釉付着。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
55	壺蓋 IV類	口径 25.2cm	天井部は丸く、口縁部は外側気味に垂下する。また端部は外側に折曲がる。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリ、内面は不定方向の仕上げナデを施す。なお外面にはミズビキ前に平行タタキがなされている。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：淡青灰色。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。
56	壺 III類	口径 25.4cm 胴径 33.9cm	口縁部は短く直立し端部は内傾する。胴部は扁平気味で、把手が2か所つく。	マキアゲ・ミズビキ成形で、外面はカキ目内面は同心円タタキを施す。把手は粘土紐の貼付けによる。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。 色調：淡灰褐色。暗緑色の自然釉付着。 焼成：良好、堅緻。 第2号古墳周溝出土。

57	壺 II類	胴径 21.2cm	肩部が張り、扁平気味の胴部である。	マキアゲ・ミズビキ成形で、外面肩部はカキ目を施し、その下に押引文をめぐらす。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：青灰色。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。
58	椀	胴径 16.6cm	底部は丸く、口縁部は内傾気味に直立する	マキアゲ・ミズビキ成形で、外面にはカキ目を施す。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：青灰色。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。
59		口径 7.5cm	口縁部は外反し、端部が逆に内湾する。	マキアゲ・ミズビキ成形による。	胎土：細かい砂粒を多量に含む。 色調：淡灰褐色。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。
60	平瓶	胴径 23.7cm	胴部は扁平で上からみると球体状をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形で、外面にはカキ目を施す。 体部の閉塞は円盤による。	胎土：1～2mm程度の砂粒を含む。 色調：淡青灰色。暗灰緑色の自然釉付着。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。
61	提瓶 a類	胴幅 12.6cm	口縁部は外反し、胴部は球体状で横からみると扁平をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形で、外面にはカキ目を施す。 体部の閉塞は円盤による。	胎土：1～2mm程度の砂粒を含む。 色調：青灰色。暗灰緑色の自然釉付着。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。
62	提瓶 b類	口径 8.8cm 胴径 21.3cm 胴幅 14.7cm	口縁部は外反し、胴部は球体状で横からみると扁平をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形で、外面にはカキ目を施す。 体部の閉塞は円盤による。	胎土：1mm程度の砂粒を含む。 色調：青灰色。暗灰緑色の自然釉付着。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。
63	提瓶 b類	胴径 21.9cm 胴幅 16.2cm	胴部は球体状で横からみると扁平をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形で、外面にはカキ目を施す。 体部の閉塞は円盤による。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：青灰色。暗灰緑色の自然釉付着。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。
64	甕		肩部があまり張らないものである。	マキアゲ・ミズビキ成形で、外面には平行タタキの上にカキ目を内面には同心円タタキをそれぞれ施す。	胎土：1～3mm程度の砂粒を含む。 色調：灰白色。 焼成：良好。 第2号古墳周溝出土。
65	甕		肩部があまり張らないものである。	マキアゲ・ミズビキ成形で、外面には平行タタキの上にカキ目を内面には同心円タタキをそれぞれ施す。	胎土：1～3mm程度の砂粒を含む。 色調：灰白色。 焼成：良好，堅緻。 第2号古墳周溝出土。

66	杯		天井部または底部を平坦に仕上げている。	マキアゲ・ミズビキ成形による。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：淡黄褐色で黒斑をもつ。 焼成：良好。 第2号古墳周溝出土。
67	甕	口径 17.8cm	口頸部が湾曲気味に外反するものである。	ヨコナデによる。	胎土：3mm前後の砂粒を含む。 色調：暗黄褐色で黒斑をもつ。 焼成：良好。 第2号古墳周溝出土。
68	甕	口径 24.8cm	底部よりも口縁部が大きく、直線気味にのびたバケツ状をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形で、外面にはカキ目を施している。	胎土：細かい砂粒を含む 色調：淡黄褐色で黒斑をもつ。 焼成：良好。 第2号古墳周溝出土。

石井ヶ原遺跡S K 7 出土土器観察表

No	器形	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	焼成・色調・備考
69	杯蓋	口径 12cm 突線径12.1cm 器高 4.65cm	天井部は丸く、突線は鋭く突出する。口縁部は垂下し、端部は段をもって内傾する。	マキアゲ・ミズビキ成形で、天井部外面は回転ケズリを施す。	胎土：1mm前後の砂粒を含む。 色調：暗灰色。 焼成：良好、堅緻。

石井ヶ原遺跡S X 1 出土土器観察表

No	器形	法 量	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	焼成・色調・備考
70	甕	口径 56cm 頸径 33cm	口頸部は大きく外反し、端部が鋤先状口縁をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形で、外面にはカキ目を施す。またその上に刺突文を2段、沈線で囲むかたちでめぐらせる。	胎土：1～4mm前後の砂粒を含む。 色調：暗灰褐色。 焼成：良好、堅緻。

VI ま と め

本調査は当初古墓1基の計画で実施し、遺跡名は石井ヶ原古墓と呼称していたが、調査区内から複数の遺跡を検出したことにより、石井ヶ原遺跡群と改めた。

石井ヶ原遺跡群の遺構と遺物についての事実関係は前項の通りである。ここではこれまで述べてきたことについて整理するとともに、若干の検討を加えまとめにかえたい。

(1) 築造時期について

本遺跡群で最も古いと推定される遺物は、第2号古墳周溝から出土した剝片であるが、関連する遺構はなかった。土器では第1号古墳出土の須恵器（杯蓋・杯身・高杯）が最も古い。須恵器片が散布した出土状態であるが、何らかの祭祀を行った後に破碎して供献されたものとは考えにくい。それは、墳丘上面から埋葬施設の床面である円礫の間のほかに、墳丘の埋め土ではない暗茶褐色土（第4層）からもこれらの須恵器が出土し、さらに、これらの須恵器よりも時期の新しい須恵器（第19図17, 第19図20, 第20図21・22）が同様に出土して墳丘内のものと接合している事実がある。このことは、出土した須恵器はいずれも第1号古墳には直接伴わず、墳丘をつくる時に混入したものと見えよう。

第19図17の杯蓋、第19図20と第20図21・22の甕の時期は、その特徴から6世紀後半に比定され、第1号古墳は現状ではこの須恵器の時期より後に築造されたものと推定される。

一方、大半の須恵器は杯蓋と杯身の側面観が長形状をなし、杯蓋の口径は13～14cm、器高4cm前後、杯身の口径は11～12cm、器高4.5～5cmという特徴からすると、三次市上四拾貫第6号古墳や広島市空長第4号古墳などから出土した須恵器と類似している。このことから新谷武夫氏のいう第I形式2類、妹尾周三氏のいうII-A型式に該当し、田辺昭三氏による陶邑編年のTK208型式にほぼ併行すると考えられ、5世紀後半に位置付けられよう。

このように第1号古墳の古い須恵器の年代と古墳の築造年代には、1世紀前後の隔たりを生じる。しかし、これら須恵器の多くは完形に復元でき、古墳築造前にこの丘陵に完形の須恵器を伴う当該時期の遺構が存在していたことは推測できる。

墳墓群は、土層図（第9図）や、SK7に供献されていた須恵器から第2号古墳築造以前につくられたものと考えられる。SK7は土壙墓ではあるが、墳墓群の在り方からすると石蓋土壙墓群もこの頃と推定される。SK7の須恵器は天井部が丸みを持ち、口径と器高さからすると先に第1号古墳で古いとした須恵器よりも新しいものと考えられる。これに類似するものは三次市上四拾貫小原17号古墳や福山市池ノ内第2号古墳などから出土し

ている。新谷氏のいう第Ⅰ形式4類、妹尾氏のいうⅡ-B型式に該当し、田辺氏による陶
邑編年のTK23型式にほぼ併行する。

次に第2号古墳出土の須恵器を見よう。いずれも周溝から出土したもので、その出土状
態からすれば本古墳に伴って供献されたものであろう。杯蓋・杯身・高杯などの特徴から
すると北西約1kmに所在する行田窯跡の製品に極めて似ている。また類似するものは三次
市松ヶ迫第2号窯跡などにみられ、向田裕始氏のいうⅡ型式第2段階に、すなわち6世紀
後半に位置付けられる。また第1号古墳出土須恵器のうち、新しい一群としたものは第19
図20の甕が若干古い要素を持つものの、ほかは第2号古墳出土の須恵器と同じ型式内に位
置付けられる。特に、杯蓋（第19図17）が特徴から行田窯跡の製品と判断されることか
らその裏付けとなろう。なお、この須恵器の段階は、県内では横穴式石室が普遍化する
時期にあたり、第1・2号古墳は、当該時期とは異なった埋葬施設の在り方をしているた
め注目される。

(2) 立地について

古墳の立地を考えると、最も来女木一帯を臨むのに適した場所にあるのは第1号古墳で
あろう。しかし、2基の古墳の築造時期は6世紀後半で、第2号古墳が第1号古墳に先行
している。このことは、前述のように2基の古墳の遺物の接合関係、及び出土状況から考
えられる。そして、丘陵頂部には、古式須恵器に伴う遺構があり、第2号古墳は南側緩斜
面にしか築造できなかった可能性が推測される。

墳墓群は、第2号古墳の盛土下から主に検出しており調査前の段階では確認できなかつ
た。これらは、丘陵緩斜面の端部に沿ってつくられており、頂部で関連する遺構が検出で
きなかったことが、築造にあたって何らかの規制を受けたものと考えられ、その位置関係
からすれば、丘陵頂部の南西側に存在すると推定される墳墓群に対して従属的な立地の在
り方を示しているものと考えられる。

(3) 第1号古墳について

墳丘下部の築造は、丘陵頂部の堆積土である暗茶褐色土（第4層）を整形して平坦面を
つくり、埋葬施設の位置と範囲の設定を行った後、これを取り巻くようにして石材を環状
に巡らしている。この環状に巡らした石材は3列明確にでき、墳裾の石列も崩れや抜取り
によって、かなり当初の形状を損なっているものの、石列の外側に暗茶褐色土が見られな
かったことから区画としても築かれていたことは間違いなく、合計4列は配置されていた
ものと推定される。いずれの石列も、各石材の長辺を連ねていた。

埋葬施設の周縁には、長方形に側石が配置され、床面には小礫が敷き詰められていた。

長辺部の側石壁面から外周に向かっては、埋葬施設を補強するための直線的な石列を、小口面を内側にして2列配置していた。環状の石列から埋葬施設の石列までの間、及び各石列間の石材は任意に置かれていた。これらの石材は基底石ともいえるものである。埋葬施設の基底石から上部は、石積みの状況から側壁としての積み上げは確認できず、ほかの基底石部と同じような石材が任意に積まれた状況であった。なお、基底石から上の石材の間隙には、淡黄褐色土・暗黄褐色土（第2・3層）が埋まった層と概ね石材のみによる層（第1層）とに分かれていた。

埋葬施設の平面形態はほぼ長方形で、床面を平坦にするために暗茶褐色土直上に円礫を敷き詰め、その隙間を暗黄褐色土で埋めて整形をしたようである。石材は、墳裾に用いられたものに比べて小さく、概ね平坦面を持っていることから、石材は意図的に選んでいたものと思われる。

埋葬施設の形態は、基底石から上の石材の積み方が前述のようにほかと明瞭な違いがなく、明らかにできなかった。むしろ上部は、石室のように積み上げていなかった可能性もある。つまり、暗黄褐色土が石材の崩落を防ぐために隙間を埋めている可能性があることから、石材を積み上げて石室をつくっていたとは考えにくい。したがって、埋葬施設に木棺を使用し、その上に礫を積み上げ被覆しただけの可能性が考えられる。

従って、第1号古墳の築造は、まず埋葬施設の範囲を整形し、埋葬施設の床石と側石を配置する。次に、石材を4列環状に連ねて大枠を定め、その間に石を詰めて最下部の石（基底石）の平面形を確定する。その後、木棺を安置し、暗黄褐色土で礫の隙間を埋めながら石材を積み上げていったものと思われる。

(4) 第2号古墳について

第2号古墳の埋葬施設は、石材の組み方から箱形石棺としたが、側石を二段に積み上げた形態的な特徴を持つ。このような特徴を持つ例として当該時期では、東広島市高屋町オケ迫第1号古墳第2号主体例がある。この主体は、下部に箱形石棺状の石を組み、さらにその上に2～3枚の石材を小口積みにし蓋石で覆った小型の竪穴式石室であると報告されている。ただ、本埋葬施設はこのような小型竪穴式石室とも異なり、一般的な箱形石棺とも異なる特徴を持ち合わせたもので、石棺とも石室とも考えられるため、今後新たな類例が報告されるのを待って、どちらの埋葬施設とすべきかについて検討をしたい。

(5) 墳墓群について

SK1～6は小型であり、小児用である。SK7はSK1～6よりさらに小型であり、乳幼児や未熟児に用いられた可能性がある。

石蓋土壙墓は、当該地域に弥生時代後期には存在しており、白鳥遺跡で確認されている石蓋土壙墓は、成人墓である。

石蓋土壙墓は、北部九州において古墳時代になると従属的な埋葬施設として用いられるようになり、最終的には未成人墓として用いられる。当該地域においても、こうしたことが言えそうである。また石蓋土壙墓の分布の東限地域にもあたり注目される。

なお、時期についてSK7は、出土須恵器から5世紀末（TK23併行）につくられたと考えられ、SK1～6が、SK7と同じ5世紀代のものとすれば小児墓の様相を示す稀な資料といえる。

石井ヶ原第1号古墳はこれまで積石塚の空白地帯となっていた地域を埋める新たな資料となり、また第1号古墳の古式須恵器の出土、第2号古墳の埋葬施設の形状や石蓋土壙墓の在り方については多くの課題が生じている。従って、今後の調査研究による資料の増加を待って、これらのことについて再検討を加えていきたい。

参考文献

広島県教育委員会「池ノ内第2号古墳」【県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告】 昭和51(1976)年

広島県教育委員会「上四拾貫古墳群」【中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告】(1) 昭和53(1978)年

広島市教育委員会「空長古墳群発掘調査報告書」 昭和53(1978)年

広島県教育委員会「白鳥遺跡」【中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告】(2) 昭和54(1979)年

広島県教育委員会・勸広島県埋蔵文化財調査センター「下山遺跡群発掘調査報告」 昭和55(1980)年

広島県教育委員会「松ヶ迫遺跡群発掘調査報告—三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査—」 昭和56(1981)年

田辺昭三「須恵器大成」 昭和56(1981)年

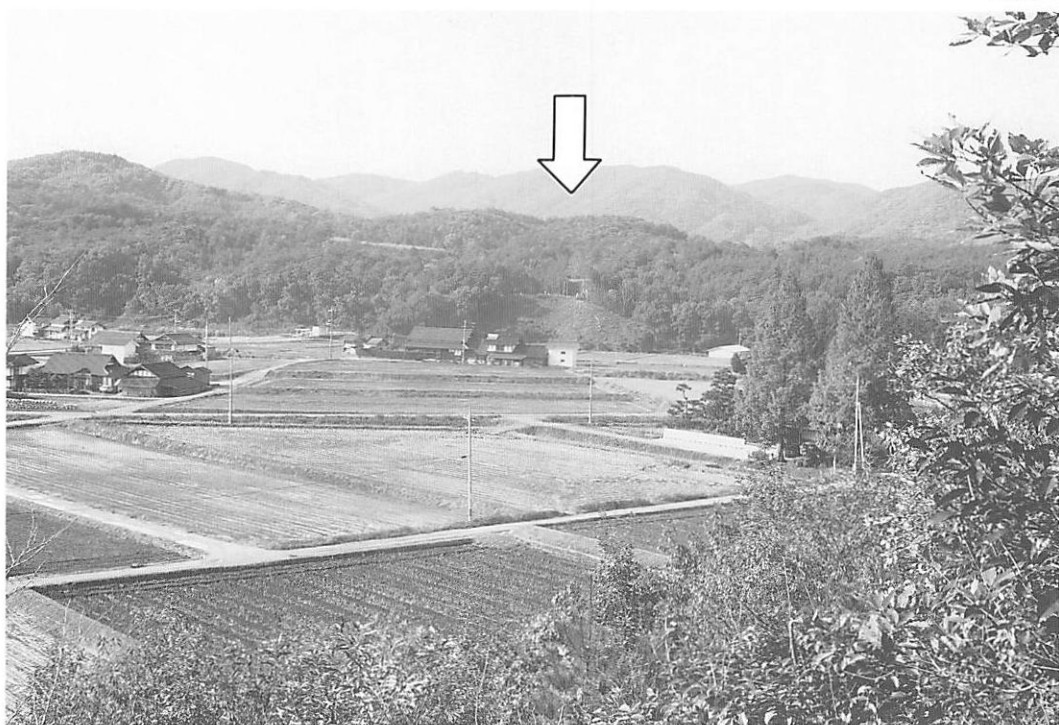
新谷武夫「安芸・備後の古式須恵器」【古文化談叢】第5集 昭和53(1978)年

向田裕始「芸備地方における須恵器生産(1)—古墳時代を中心として—」【芸備古墳文化論考】 芸備友の会 昭和60(1985)年

妹尾周三「IV 考察 広島県における古式須恵器について」【山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告】IV 勸広島県埋蔵文化財調査センター 昭和62(1987)年

小野忠熙「積石塚の地域相—中国地方」【考古学ジャーナル 特集・積石塚】No.180 昭和55(1980)年

福岡市教育委員会「井尻B遺跡」(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第175集) 昭和63(1988)年



遺跡群遠景（南東から）



遺跡群近景（東から）



石井ヶ原第1・2号古墳調査前の状況（北東から）



石井ヶ原第1号古墳表土堆積状況（北東から）



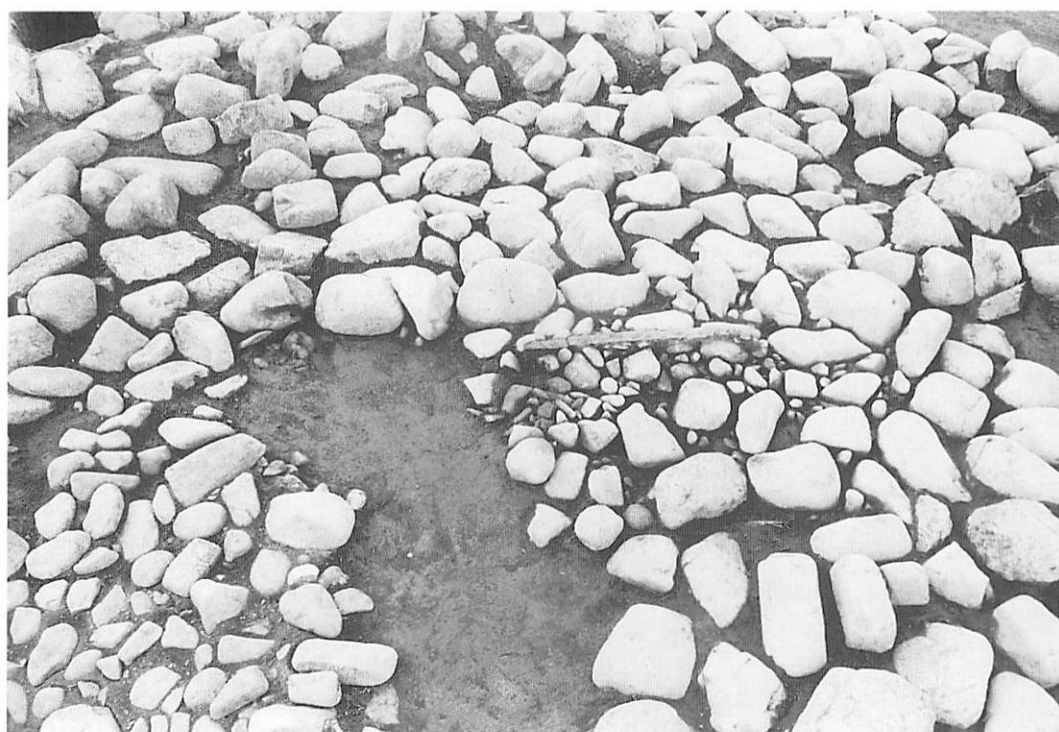
石井ヶ原第1号古墳表土除去後の状況（南東から）



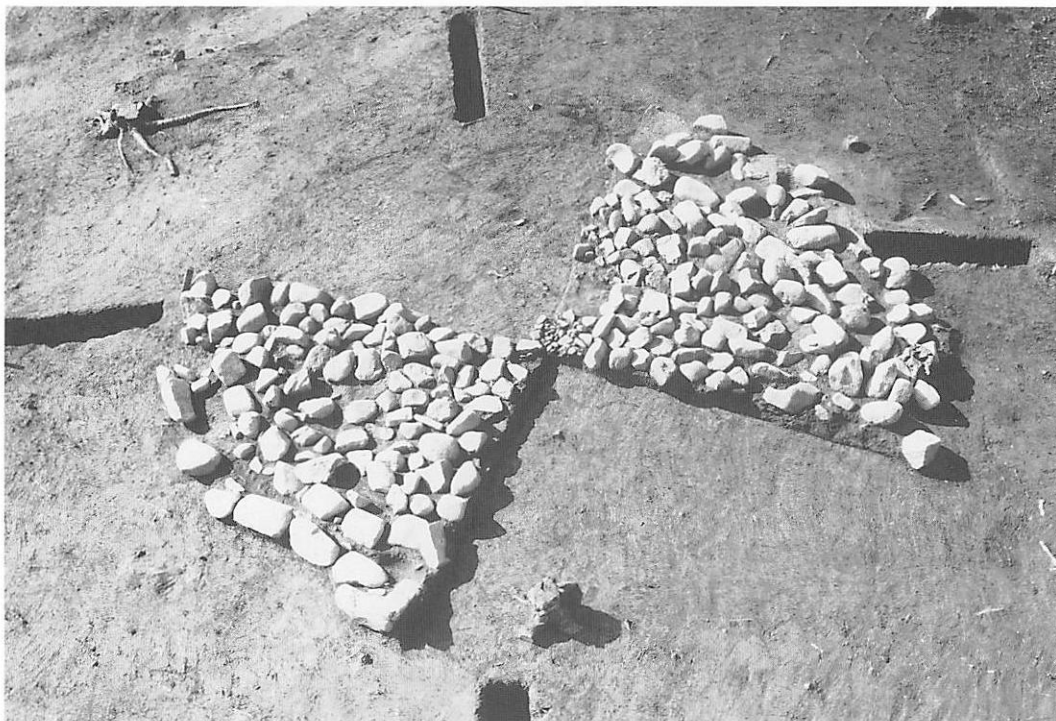
石井ヶ原第1号古墳表土除去後の状況（北東から）



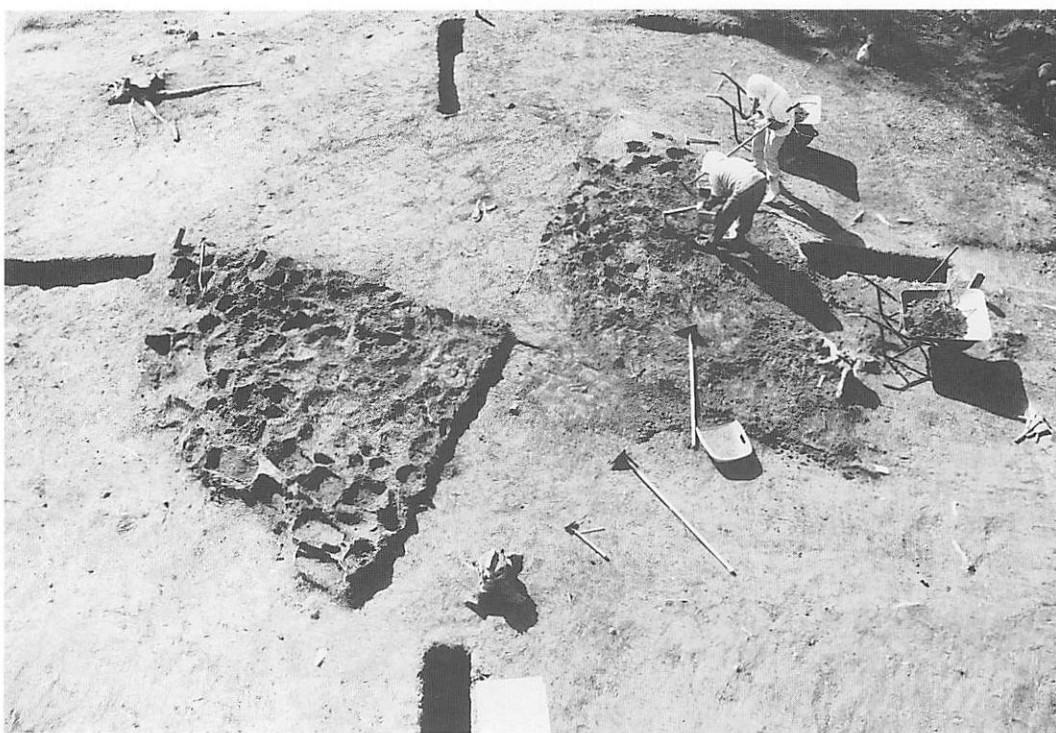
石井ヶ原第1号古墳基底石検出状況（北東から）



石井ヶ原第1号古墳埋葬施設検出状況（南東から）



石井ヶ原第1号古墳基底石築造状況（北東から）



石井ヶ原第1号古墳基底石除去作業風景



石井ヶ原第1・2号古墳配置状況（北から）



石井ヶ原第2号古墳・墳墓群配置状況（北東から）



石井ヶ原第 2 号古墳墳丘検出状況（北西から）



石井ヶ原第 2 号古墳周溝内遺物出土状況（北西から）



石井ヶ原第 2 号古墳埋葬施設検出状況（南東から）



石井ヶ原第 2 号古墳蓋石除去後の状況（南東から）



石井ヶ原第 2 号古墳蓋石除去後の状況（南西から）



石井ヶ原第 2 号古墳埋葬施設完掘状況（北西から）



石井ヶ原遺跡墳墓群全景（北東から）



石井ヶ原遺跡墳墓群完掘状況（北東から）



石井ヶ原遺跡S K 1 検出状況（南から）



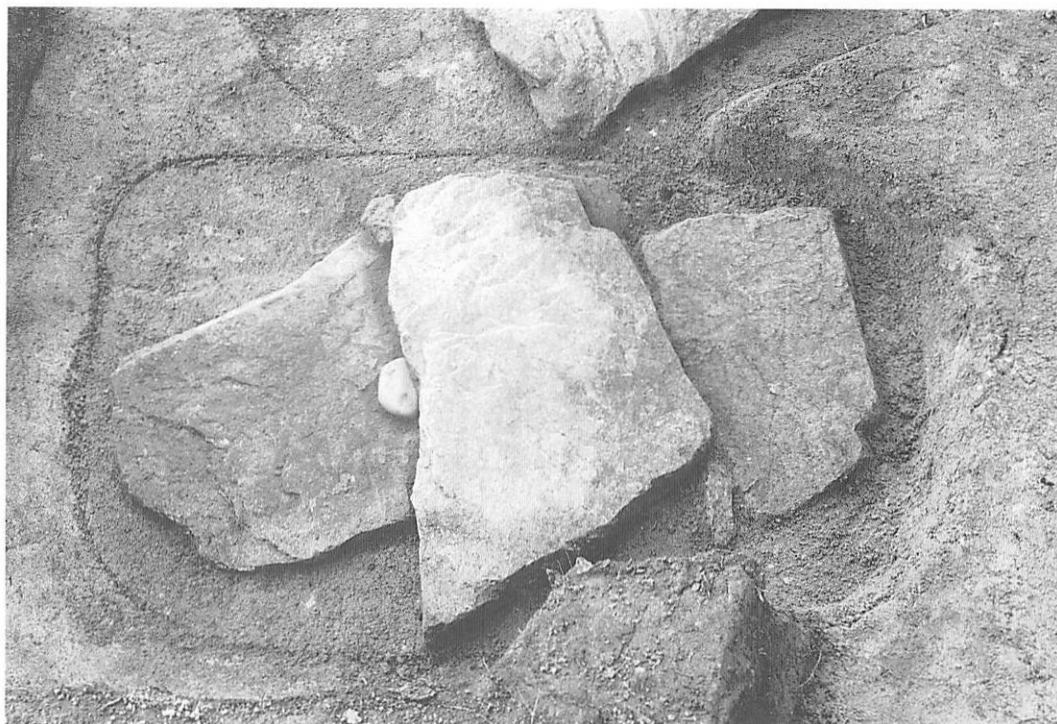
石井ヶ原遺跡S K 1 完掘状況（南から）



石井ヶ原遺跡S K 2 検出状況（南から）



石井ヶ原遺跡S K 2 完掘状況（南から）



石井ヶ原遺跡S K 3 検出状況（北から）



石井ヶ原遺跡S K 3 完掘状況（東から）



石井ヶ原遺跡SK 4 検出状況（東から）



石井ヶ原遺跡SK 4 完掘状況（東から）



石井ヶ原遺跡S K 5 検出状況（北西から）



石井ヶ原遺跡S K 5 完掘状況（北東から）



石井ヶ原遺跡S K 6 検出状況（北西から）



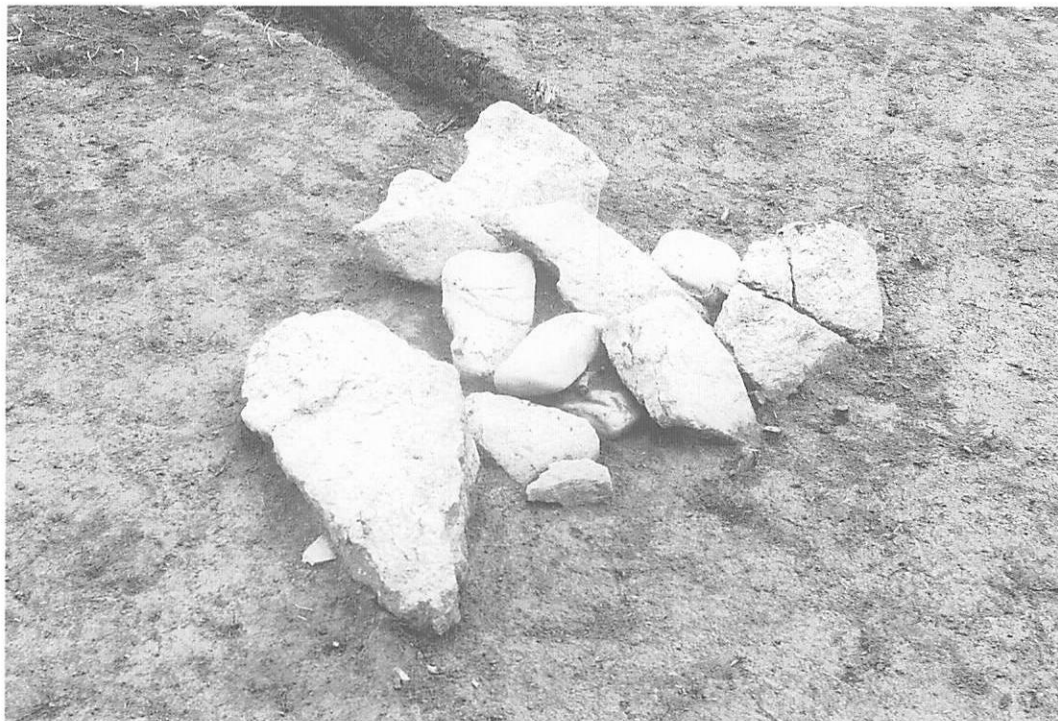
石井ヶ原遺跡S K 6 完掘状況（北東から）



石井ヶ原遺跡S K 7 遺物出土状況（南西から）



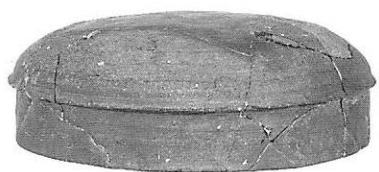
石井ヶ原遺跡S K 7 完掘状況（南西から）



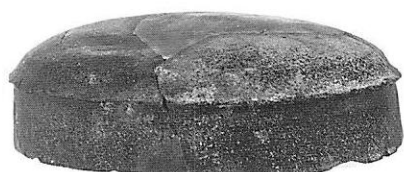
石井ヶ原遺跡S X 1 検出状況（東から）



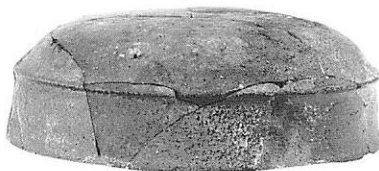
石井ヶ原遺跡S X 1 遺物出土状況（北西から）



1



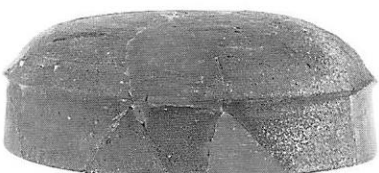
7



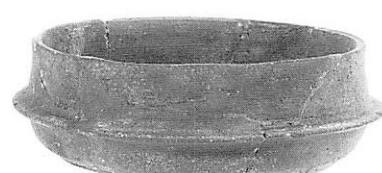
2



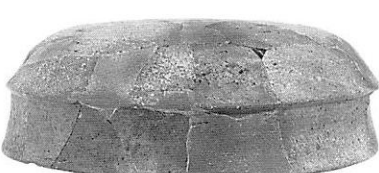
8



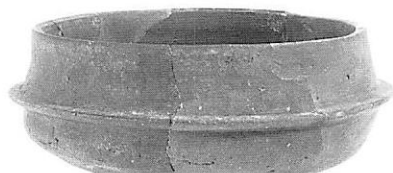
3



9



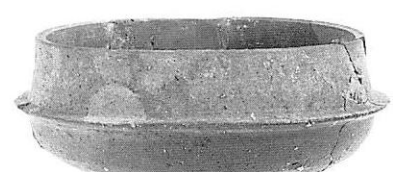
4



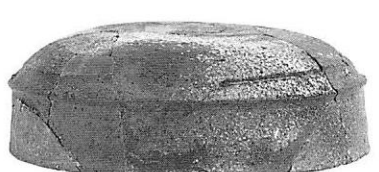
10



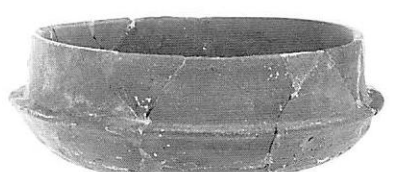
5



11



6



12



13



18



14



26



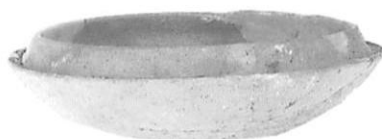
15



27



16



28



19



31



34

出土遺物II



20



21

出土遺物III



35



39



36



41



47



42



49



46



48



54



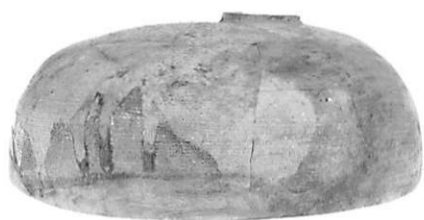
57



55



58



60



56

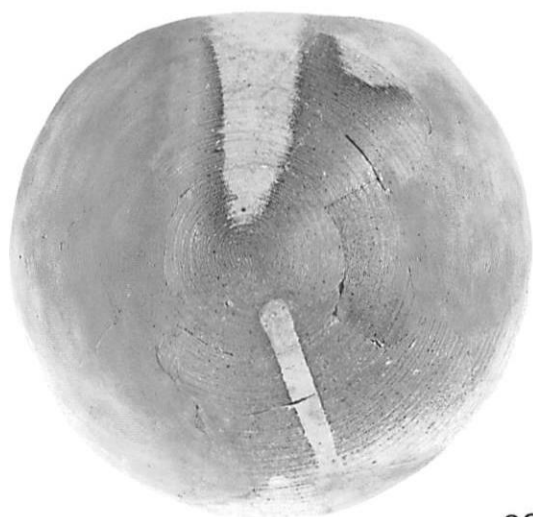
出土遺物V



62



68



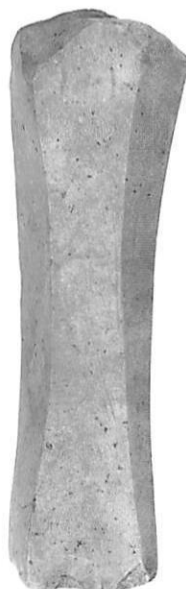
63



71



69



23



24

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第 89 集

石井ヶ原遺跡群

発行日 平成 3 (1991) 年 3 月

編集・発行 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

〒733 広島市西区観音新町 4 丁目 8 - 49

TEL (082) 295-5751

印刷所 産興株式会社